

古墳時代の 玉飾りの世界



2017 古代歴史文化協議会

ごあいさつ

近年、平城遷都 1300 年、古事記編纂 1300 年、伊勢神宮と出雲大社の遷宮などの節目の年が重なり、国民の皆様の間で、日本という国がどのようにしてできたのかなど、古代社会に対する関心が非常に高くなってきております。

また、2020 年は、日本書紀編纂 1300 年、東京オリンピック、パラリンピック開催の年にあたり、国内外から日本の歴史文化により注目が集まると考えております。

そこで、個々の地域における研究だけでは見えにくかった日本の大きな古代史の流れを解明するため、古代歴史文化の調査・研究・活用に関心のある 14 県が連携して「古代歴史文化協議会」を設立し、共同調査研究を行うことといたしました。

協議会では、古代の政治や祭祀を解明する上で重要な「古墳時代の玉類」をテーマとして平成 26 年度から調査研究を行っており、その成果を講演会や展覧会などの形で皆様に広く情報発信してまいります。

一昨年、昨年に引き続き第 3 回目となる今回は、「古墳時代の玉類」をテーマにした最後の講演会になります。「古墳時代の玉飾りの世界」と題して、この研究の第一人者による講演と、各県担当者によるパネルディスカッションを通じて、古墳時代の玉の装い、流通、信仰について考えるとともに、第 1 回から今回までの討論のとりまとめを行います。

本講演会を通じて、皆様の古代の歴史・文化への関心がさらに高まることを願っております。

開催にあたり、共催いただきました読売新聞社と、御指導・御協力いただきました関係者・関係機関の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 11 月 18 日

古 代 歴 史 文 化 協 議 会
会 長 島 根 県 知 事 溝 口 善 兵 衛

第3回 古代歴史文化協議会講演会

古墳時代の玉飾りの世界

13:00 開会あいさつ
古代歴史文化協議会副会長 奈良県知事 荒井 正吾

13:10~14:10 < 基調講演 >

「玉類研究から古墳時代像を見直す」

奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷 文則

: 資料P1~6

14:10~14:20 休憩

14:20~17:00 < パネルディスカッション >

(15:50~16:00 休憩)

コーディネーター 菅谷 文則

~テーマ①~ 「古墳時代の玉飾りの世界」

パネリスト	奈良県 (奈良県立橿原考古学研究所)	鈴木 裕明	: 資料P7~10
	三重県 (三重県埋蔵文化財センター)	石井 智大	: 資料P11~14
	広島県 (広島県立歴史博物館)	尾崎 光伸	: 資料P15~18
	佐賀県 (佐賀県教育庁文化財課)	淵ノ上隆介	: 資料P19~22
	岡山県 (岡山県古代吉備文化財センター)	亀山 行雄	: 資料P23~26
	兵庫県 (兵庫県立考古博物館)	鐵 英記	: 資料P27~30

~テーマ②~ 「古墳時代の玉類」

パネリスト テーマ①のパネリスト

石川県教育委員会事務局文化財課 課長補佐 伊藤 雅文 (第1回パネリスト代表)

福岡県教育庁文化財保護課 企画係長 吉田 東明 (第2回パネリスト代表)

17:00 閉会

日程: 平成29年11月18日(土) 13:00~17:00

場所: よみうり大手町ホール

主催: 古代歴史文化協議会
読売新聞社

表紙: 右 奈良県橿原市 新沢千塚500号墳 メノウ・水晶・ヒスイ製勾玉
(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵)
左 三重県松阪市 常光坊谷4号墳 巫女形埴輪 (松阪市教育委員会蔵)
裏表紙: 佐賀県鳥栖市 都谷古墳群ST014号墳 玉類 (佐賀県教育委員会蔵)

玉類研究から古墳時代像を見直す

奈良県立橿原考古学研究所所長 菅谷 文則

1. なぜ“玉文化”か？

14県で構成している古代歴史文化協議会の設立準備を始める段階で、何を研究テーマとするかが議論された。そのもっとも簡単な考古資料を共通基盤とし、14県に共通して存在する遺構、遺物を研究することによって、全国に共通する古代文化の研究の水準を高めることが出来る。または新しく事実を発見することが出来るなどを考慮して、多くの研究候補から玉類に収斂することが出来た。

その理由は、14県にともに出土品があること。これは外面的な理由であるが、必要な条件であると思う。当初の候補として、古墳時代の鉄刀剣の銘文なども考えられたが、14県の枠を外して47都道府県の単位で見ると、数県で出土しているのみで共通の研究テーマとしてふさわしくない。同じような理由で、弥生時代の銅鐸、青銅製武器などもふさわしくない。こうして玉を共通研究テーマとすることになった。

もちろん、従前の玉に関する研究が、かなり進んでいたこともある。箇条書きにすると以下ようになる。

①玉の材質研究が、昭和30年代から進んで来ていて、ヒスイ（硬玉）を富山県と新潟県の日本海岸（現在ではヒスイ海岸として観光地化している）で採取したことが明らかである点。コハクも岩手県久慈産のものが西日本の各地から出土している点が、室賀照子博士の研究で1974年に明らかになっていること（千葉県銚子産などもある）。このヒスイとコハクは、1945年以前は、おのおの東南アジアのビルマ（現：ミャンマー）とモンゴル・シベリアからもたらされたこと、学術的研究ではなく、なんらかの意図をもって述べられることが多かった。

②出雲玉造遺跡の発掘調査などが、1920年代に浜田耕作教授を中心として実施されていたこと。出雲玉造を代表する碧玉、メノウの産地同定と、製作過程研究が進んでいたこと。玉を磨き上げる、いわゆる玉砥石の石材として、和歌山県の紀ノ川南岸の片岩が使用されていたことが研究成果としてすでに発表されていたため、原料石材の移動とともに、生産用具の遠距離移動も研究テーマにできること。

③グリーンタフ（緑色凝灰岩）が、玉以外にも、前期

古墳出土の石製品（鋳形石、車輪石、石釧、その他）の原材料（石材）であり、消費地つまり古墳での研究が進んでいる点。

④韓国出土のヒスイ製勾玉の原材料の産地が、韓国の学界においても日本産であることを肯定する意見が多くなってきた点。全出土ヒスイ製勾玉のおよそ半分前後も出土している朝鮮半島南部のヒスイ製勾玉の研究。天河石（アマゾナイト）、色の濃く深いメノウ（この赤色のメノウは、今日までのところ、日本では石材としての産出地は知られていない。）などを対象に、研究が可能である客観的状況となっていること。

⑤ガラス製玉類の分析が、各研究機関において進んでいること。

2. 研究テーマは？

このような状況があり、14県の担当者は一致して玉の研究をしてみようと決定した。玉の生産技術を中心とした「玉作り」と、記紀風土記（逸文を含む）、古語拾遺、出雲国造神賀詞などが伝える玉との関係も重要な視点の一つであることは、われわれが標榜する古代歴史文化の一つの重要なテーマであるという意識があったのであるが、考古学の手法からどこまで迫ることができるかが問われていると考えて、3年にわたり検討を行ってきた。講演会はその中からテーマを絞り、初年度は「玉作り」を巡る問題、第2年目は玉から古代日韓交流を解明すること、そして今回は玉飾りの変遷、地域的な広がり、その王権や祭祀との関連性をテーマとした。

まず、古墳時代の「玉類」と表現しているものを形態から分類することと、その材質を知ることから始めた。もちろん、その前提として各県において出土した玉類の数量を確認した。県保有のみならず、市町村、時には個人や美術館所蔵品、国有となっている玉類の総数の把握に努めた。考古学では、集成という（註）。

一例をあげると2015年6月現在の集成では、奈良県下の244基の古墳と、31ヵ所の集落遺跡から、約7万個が出土していることが判った。その素材は、ガラス約74.8%、滑石類16.9%、土製3.8%、碧玉1.5%である。他約3%に、金属、グリーンタフ、コハク、メノウ、

ヒスイ、埋木、オパール、鉄石英、その他がある。銀の勾玉にガラスを加えたものもあるが、一般的に知られている玉類の素材は、おのおの1%にも満たない。奈良県以外の地域においても、ほぼ同じ傾向であった。おもな素材、つまり原材料を表示しておく(表1)。

玉を形態から表2のように分類したが、いわゆる異形としているものも多い。異形が生産された要因はいくつか考えられる。①原石の形態が、歪であったために異形となった。②工人が見様見まねで製作したために異形となった(伝聞にのみ基づいていて、典型例を知らなかったため)。③工人が何気なく、または特に意図せずに製作した。現在の芸術家が同巧よりも異曲を求めるに近い感覚で製作した(これは、一般的には古代社会において認められないと思うが!)④その他。

このことを理解するために、弥生時代のガラス製勾玉を例としてみよう。弥生時代の開始の頃の佐賀県唐津市菜畑遺跡では、ヒスイ製のC字形の勾玉と異形勾玉とが出土している。その後の弥生遺跡では典型的なものがほとんどである。弥生時代中期に福岡県春日市須玖岡本遺跡から長さ4.8cmの典型的な深緑色のガラス製勾玉が出土している。これは、ヒスイ製の勾玉を模して、新しく技術導入されたガラスで製作している。ヒスイを越えたガラス製勾玉の誕生であったと言ってもよい。容易に入手できる材料で代用品を作ったものではなく、ガラス工人らが、人々が珍重する深緑色のヒスイ製勾玉以上の玉を目指したものであると考えるべきである。その後のガラス製勾玉はヒスイの深緑色を追い求めるのではなく、コバルト色、さらには浅いコバルト色も作り出す。時には、黄色、白色、こげ茶色などのものも、ごく少数ではあるが製作している。

もう少し勾玉について記す。大和では、出現期古墳には玉類の副葬はない。前期古墳の桜井茶白山古墳以降に玉の副葬が始まった。ヒスイ製勾玉には、頭部の孔から、勾玉頂部に2本と、アゴとも言うべきところに1本の3本の線を彫り出した丁字頭勾玉がある。昭和30年代の私が学生であった頃には、丁字頭勾玉はより上級のものと、なんとなく認識されていた。出土状況の確実な例を通覧すると上級のものとは、必ずしも言えないと思う。製作地の違いなどの視点からの検討が、今後のテーマでもある。

3. 大和の勾玉の所有形態

奈良盆地の大形古墳を見ると、前期古墳の桜井茶白山古墳、メスリ山古墳などには、長さ3cm以上のヒスイ製勾玉があり、色もいわゆるヒスイ色のものが多い傾向にある。ところが、小形の前方後円墳である新

沢千塚500号墳では3cmよりも小さなヒスイ製勾玉3個、大きなメノウ製勾玉10個、水晶製勾玉3個が出土している。奈良県下の古墳での勾玉出土数の多い例である。古くに破壊されていて詳細が判らない宇陀市澤ノ坊2号墳では20個のヒスイ製勾玉が出土している。そのうちの1個は、2個の勾玉が側面で接続している異形のものであるが、そのすべてが小さい。中期初頭の大形古墳の島の山古墳では、埋葬施設内からは勾玉が出土していない。古い時代に乱掘されていた巨大前方後円墳の巢山古墳の箱式石棺から出土したと報告されている勾玉は滑石製で、頭部に綾杉文を飾ったものである。中期古墳でも早い時期の室宮山古墳では、大量の滑石製勾玉が出土している(出土状況は乱掘のため不明)。ヒスイ製勾玉はヒスイでも白灰色のもので、丁字頭のもの、碧玉製である。滑石製勾玉が出土した桜井市池之内5号墳でも大形の勾玉は、蛇紋岩製であった。

ところが、小形の古墳からはヒスイ製勾玉が出土している。被葬者は海外から単独で来日した人物が推測されている新沢千塚126号墳では、ヒスイ製小形勾玉4個と外来系の金・銀空玉、金箔入りサンドイッチガラス玉、雁木玉などが出土している。周知されているように、この古墳からはガラス製壺・皿などとともに金製品が多数出土している。新沢千塚323号は、後期後半の木棺直葬墓であるが、メノウ製勾玉13個と、水晶製勾玉14個を一連とした玉類が出土している。また純金製(いわゆるムクの)耳環1対が出土していて、被葬者の出身地が議論の対象となる古墳である。ヒスイ製はない。

大和を中心としたヒスイ製勾玉について、やや大胆な仮説を提出しておくことにする。纏向遺跡に近い位置のホケノ山古墳、纏向遺跡の北の柳本台地上の黒塚古墳、天神山古墳さらに北東の中山大塚古墳などには、ヒスイ製勾玉を含む玉類が出土していない。大和の古墳出現期には、玉類の副葬(あるいは身体着装)の意識はなかったといえる。次の段階、つまり前期古墳のうちでも前半の桜井茶白山古墳、下池山古墳などではヒスイ製勾玉を含む玉類の副葬が始まる。前期では、後半からはメノウ・水晶・コハクが加わる。

関東から九州までの14県の集成によると、ヒスイ製勾玉は、前期から中期と後期にかけて増加する傾向にあるのが、福岡県、佐賀県である。中期には少なく、後期にヒスイ製勾玉が増加するのが兵庫県、鳥根県、岡山県である。前期から中期・後期と減少するのが、奈良県、和歌山県、鳥取県、広島県である。中期に多く、後期に減るのが石川県である。先に記した奈良県の古

墳では、大古墳と中小古墳との間にも差異があることがわかる。長さ3cm以上を大形とすると、大形ヒスイ製勾玉と、中小ヒスイ製勾玉との副葬傾向の違いも各県ともに、明確化してきた。全国におけるヒスイ製勾玉の使用（つまり所有）状態の傾向が異なっている。

このことは、ヒスイ製勾玉の原石取得から製品化、そして所有に至るまでには、1つの集約された、あるいは集中的な（管理）形態ではなく、複数の生産から消費地までの方式が幾通りもあり、おのおの入手法が存在したことを強く感じる。

4. なぜ大和ではヒスイ製勾玉副葬が減るのか？

それでは、なぜ、大和の大形古墳では前期末から中期初頭以降は、大形のヒスイ製勾玉を多く所有しなかったのか？

このことについては、2016年12月10日に開催した『第2回古代歴史文化協議会講演会—玉から古代日韓交流を探る—』における韓国慶北大学校朴天秀教授の講演と講演資料にも明らかなように、朝鮮半島南部には多くのヒスイ製勾玉が出土している。その埋蔵量は、5000点前後が推定されている。日本の既出土勾玉の総数は正確には知ることが出来ない（江戸時代後半から明治時代の山城地域や大和北部における凄まじい盗掘による出土品は、世界各地に分散収蔵されている。江戸時代後半以後の三種の神器を崇める傾向も拍車をかけたようである）。あるいは朝鮮半島出土の方が多いかもしれない。ここまで述べると、ヒスイ製勾玉は海を越えた交易財であったことが知られる。

交易財としてのヒスイ製勾玉の交易対象となったのは、4世紀では朝鮮半島南部の、金官伽耶の地域、具体的には福泉洞古墳群と大成洞古墳群である。両古墳群は、倭系文物の出土品数が多く、グリーンタフ製鏃などが出土している。奈良県桜井市池之内古墳群出土石製鏃と酷似しており、生産者は同一工房を推定させるものであった。

2015年現在で、奈良県には玉作り関連遺跡が27ヵ所あり、そのうち16ヵ所は玉作りが確実に行われていたと推認されている（第1回古代歴史文化協議会講演会『古墳時代の玉作りと神まつり』P18）。なかでも大規模で、多種の石材・化石を用いて各種の玉類を製作していたのが、曾我遺跡である。碧玉、グリーンタフ、メノウ、ヒスイ、滑石、水晶など多種類の玉類を生産していた曾我遺跡は、詳しく検討されることもなく、大和王権の大規模な玉作工房群であるとされている。ところが、巨大古墳の所在地に政治権力が集中しているとされている研究状況からみると、大和から

政治権力が河内に移って以降に、曾我遺跡は最盛期を迎えている。河内の王朝との関係が微妙であった葛城氏の中心と考えられている葛城地方には大規模な玉作り遺跡は認められていない。鉄などの金属に関する工房を含む遺跡は多く存在している。曾我遺跡においてヒスイが使用され始めるのは、古墳時代中期中葉以降で、水晶、メノウ、コハクが加わる。新沢千塚500号墳に代表されるメノウ、ヒスイ、水晶の三種の勾玉の組み合わせ使用に遅れて始まったのが、曾我遺跡の勾玉生産であった。玉作りの始まりは、C2地区での滑石が中心で、ついで碧玉が増加している。滑石の石材は、吉野川から紀ノ川南岸に片岩の間層として露頭があり、曾我遺跡の玉作りは、ヒスイから始まったものではない。遺跡地の東に位置している式内社天太玉神社がある。この神社は忌部氏の祖神を祀っている。

私は、この曾我遺跡は、地名通り蘇我氏が、葛城氏に隷属していた頃に滑石製玉類生産を小規模に始めたのが、葛城氏没落後は、規模を拡大して行ったものと思っている。忌部氏と蘇我氏の関係は、今後の研究課題としておきたい。奈良県曾我遺跡を大和王権（大和王朝などとも呼ばれている）の中央玉作り遺跡と単純化して考えることは、ヒスイ・コハク・メノウ・グリーンタフなど、奈良盆地周辺に産出しない高価でかつ稀少であった玉作り素材が、原産地（ヒスイなら糸魚川を挟んだ新潟県側と、富山県側の両ヒスイ海岸周辺）から、コハクなら太平洋岸の岩手県久慈から、どのような経路で、曾我遺跡に運ばれたかはまったく未知の研究分野である。ヒスイは富山県・石川県の遺跡でも原材を加工して製品化していることが判っているが、ヒスイのすべてが、海岸線をたどって曾我までやってきたとは速断しないのが、歴史の真実であろう。コハクも同じである。千葉県銚子産のコハクの多くは、東海、近畿までは運ばれていない。

早く、昭和20年末から30年にかけて室賀照子氏によって、提唱されたアンバーロードも具体的なルートを示したものではなかった。静岡県沼津市の大廓式土器は、纏向遺跡に古墳時代初期に至っている最も東端の土器である。近年の研究は大いに進化していて、埼玉県東松山市反町遺跡などの大きな川沿いの内陸部の遺跡や房総半島の太平洋岸、そして仙台市からさらに北方の遺跡からも出土している。この型式の壺形土器は器壁が厚く、土器自体も大きく、一種のコンテナとする見方もある土器である。東北地方の物品を東海まで運搬する一つ的手段と見て良い。ただし、運搬物がコハクや埋木であったことを示す資料は全くない。だが、仮説として提示することは許されるであろう。

5. 玉作り遺跡の研究

1927年に京都帝国大学考古学研究室から『出雲上代玉作遺物の研究』が刊行された。それからおよそ30数年を経て、1959年から國學院大学の寺村光晴氏により、石川県加賀市片山津玉造遺跡の3次にわたる発掘調査が行われた（調査団長は藤田亮策〔1892～1960年〕）。1963年に、『加賀片山津玉造遺跡の研究』が刊行された。1966年には寺村光晴氏が『古代玉作の研究』を刊行され、玉作りの研究が考古学の研究テーマとなった。その後、各地の玉作り遺跡の研究が進められた。そして各種の石材から作られる玉類の製作過程が明らかにされた。日本海沿岸（佐渡の鉄石英製玉作りを含む）の研究と、房総半島の玉作り遺跡などが発掘調査された。玉作りの時期も詳しく調査が進められた。これは弥生時代から古墳時代の土器型式の編年研究が進んだことも関係が深い。昭和50年代初期の奈良県桜井市纏向遺跡における出土土器の研究によって、大和の弥生時代から古墳時代の土師器系土器の編年が進み、さらに纏向遺跡からは、北部九州から駿河、近江から北陸地方で焼成された土器が大量に出土し、各地の古式土師器系土器の同時期性が確認された。中期からは須恵器の編年研究が進んだことが大きい。私が大学生であった昭和30年代後半では、古墳出土の器物の共存関係を中心に古墳の年代、つまり編年を考えていたのは、精密度が各段にあがった。これに埴輪研究が加わった。

こうして、昭和20年代から30年代に三角縁神獸鏡と一部の石製品（鋳形石、石釧、車輪石など）から考えられていた古墳時代4世紀開始説は、ほぼ前提が崩れた理論となった。ただし、今もそう考える人がいることも事実である。

1958年に『古墳とその時代』（古代史研究〈第3、4集〉、朝倉書店）に、奈良県天理市の崇神陵・景行陵と治定されている前方後円墳が、最古の古墳であり、このために天皇系譜が崇神以降は信じることができると書かれていた。両天皇陵は、平安時代後半には、現崇神陵が景行陵のようにされていたことを秋山日出雄氏が、文献史料などから指摘され、不確実な史料情報の使用に警告を鳴らされたが、その後も出版された考古学の概説書は変わらなかった。三角縁神獸鏡は大和王権（王朝）が、各地の王に配布したとする考え方のフレームは、記紀の崇神、垂仁、景行の神話と、出土品を直接結びつけたものであることを、昭和40年代から私が指摘しているところである（光文社刊『考古学ジャーナル』、同朋舎出版刊『日本人と鏡』などに自説を述べている）。

前方後円墳の成立から全国各地での古墳築造が、中央集権的（地方の特産も中央に集約し、再分配する）なものでなかったかもしれないと思わせる状態が、出雲玉作が製作した碧玉製玉類のうちには、出雲からごく近くにしか分布しないものがあることでも明らかになった。出雲玉作が製作した玉類のすべてが、大和に一括してもたらされる、それらが全国に再分布したと考えることも根拠のない仮説の一つと言うべきであろう。

古墳時代前期から中期の玉類研究は、日本列島各地の古墳が、そうしてその位置に築かれたかという問題を解き知るための重要な研究の切り口であるのかも知れない。

さきにヒスイ製勾玉が、大和・河内などの古墳から減少することの理由として、交易財であると指摘した。朝鮮半島南部の鉄素材を導入するために等価交換されたのが、ヒスイ製勾玉と推定した。新羅（時期によって領域に若干の移動がある）の地域からの凄まじい量のヒスイ製勾玉の出土が、これを示している。高句麗の領域からは、知り得る限り出土例はない。百済では、瑞山・羅州などにおいてヒスイ製勾玉が出土している。朴教授の集成によると百済では合わせて44点出土している。523年に没した武寧王陵には16点のヒスイ製勾玉が出土しているが、頭部に金帽を被せている。

鉄素材以外にも、西アジア産のガラス容器・玉類（雁木玉、トンボ玉、重層ガラス玉）なども、その対象であった。もちろんこれらの小さな玉類のみが交易されたものではなく、布帛（錦なども含めて）などと関連していたことは容易に気づく。鉄とヒスイ製勾玉の交換比率などの研究は、気の遠くなるほど彼方のテーマと思うが、案外早く解明されるかも知れない・・・。

仏教と勾玉の関係も深い。韓国の百済、新羅ともに、王室の寺院、塔から出土している（表3）。

日本でも、奈良県明日香村の飛鳥寺塔心礎周辺から、ヒスイ製勾玉2点、メノウ製勾玉1個、ガラス製勾玉1点と大量のガラス小玉が出土している。古墳からの出土品を見ると、高松塚古墳、キトラ古墳などからは、ガラス玉は出土しているが、勾玉は出土していない。このころから勾玉は仏教用具となっていく。東大寺法華堂不空罽索観音の宝冠には、多数の勾玉が用いられている。正倉院には、金銅幡に勾玉が吊られているなど、仏教の宝物となるが、この時代はきわめて短い。

表1 主な玉類に用いられた素材

種類	名称	色	硬度	主な玉の種類
石材	ヒスイ	濃緑色から緑白色	6.5~7	勾玉・丸玉・棗玉・その他
	緑色凝灰岩	淡緑色	—	勾玉・管玉
	碧玉	濃緑色他	7	勾玉・管玉
	メノウ	赤橙色・白色他	7	勾玉・管玉
	水晶	無色・透明	7	勾玉・切子玉
	滑石	灰色・白色他	1	勾玉・子持勾玉・白玉・小玉・その他
化石	コハク	黄色・赤褐色	2~2.5	勾玉・棗玉
	埋木	黒色	—	棗玉
金属	金	金色	—	勾玉・丸玉
	銀	銀色	—	勾玉・丸玉・その他
ガラス	ガラス	各種		勾玉・管玉・丸玉・小玉・その他
粘土	土玉	土色	—	丸玉

※硬度は一般的数字。モースの硬度による。

『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料 2015年 p26表1、『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』鳥根県立古代出雲歴史博物館企画展図録2009年ほかを参照して、玉の素材と主な玉の種類を対比した。



図1 勾玉（異形勾玉の一例（上）と丁字頭勾玉（下））
奈良県宇陀市澤ノ坊2号墳



図2 子持勾玉
奈良県桜井市松之本遺跡

註) 14県の玉類出土古墳・集落遺跡、玉作り関連遺跡の集成については、大部となるため掲載できなかったが、古代歴史文化協議会ホームページの「研究内容・玉出土遺跡データ」に「玉出土遺跡データベース」として現在公開している。ご活用頂きたい。

<http://kodairekibunkyo.jp/>（古代歴史文化協議会ホームページ）

表2 勾玉と玉類の外形による分類

名 称	形 態	材 質	備 考
勾玉	頂部に孔を空けたC型の玉	ヒスイ、碧玉、メノウ、水晶、ガラス、滑石、金属など	丁字頭（線刻）をもつものがある。
異形勾玉	頂部と尾部が接続したもの。2個が腹部に接続したものなど。	ヒスイ、滑石など	
子持勾玉	大きい勾玉に小さい勾玉が付けられている。	滑石など	
管玉	円筒形でタテ方面に孔が貫通している。	碧玉、水晶、ガラスなど	
丸玉	球のような形で、中央に孔がある。	碧玉、メノウ、水晶、ガラス、金属、土など	
小玉	小さい玉でビーズ玉に似る。	主にガラス	
白玉	小さい玉で小玉に似る。	滑石	ガラス小玉を模したか。
算盤玉	ソロバンの玉に似たもの。	碧玉、メノウ、水晶、金属、埋木（うもれぎ）など	
切子玉	角錐体を2個つなげたような形で、断面が六角形のものが多い。主に水晶で作られ、タテ方向に孔があげられる。	水晶、メノウなど	
棗玉	ナツメの実に似た形の玉で、側面は丸みを帯びている。タテ方向に孔がある。	碧玉、埋木、コハク、滑石など	線刻をもつものがある。
平玉	平らな玉で、表裏面と側面は面取りされている。側面に孔があげられている。	碧玉、滑石など	
垂玉	不定形なかたちをしており、上端に孔がある。	水晶、骨・牙など	

『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料 2015年 p29、『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』高根県立古代出雲歴史博物館企画展図録2009年ほかを参照して、玉の外形（種類）と主な素材を対比した。

表3 百済・新羅地域の寺院出土の勾玉

国名	寺 名	勾 玉	備 考
百 済	陵山寺	蠟石製1点	
	王興寺	ヒスイ7点、ガラス1点	577年
	益山弥勒寺	ヒスイ1点	舍利莊嚴具
新 羅	皇龍寺	ガラス9点、水晶1点	心礎上面
	皇龍寺	ヒスイ7点、ガラス63点、メノウ1点	心礎下部から根石付近

古墳時代の装いの変遷

奈良県

(奈良県立橿原考古学研究所 鈴木 裕明)

1. はじめに

古墳からは埋葬施設を中心として、被葬者の装身具、あるいは副葬品・祭祀具として数多くの玉類が出土している。すべての古墳にみられるわけではないが、古墳時代前期から終末期＝飛鳥時代（7世紀）まで、古墳時代を通じて玉類が出土している。古墳時代の玉飾りは、弥生時代以来の器種・材質を踏襲して始まり、徐々に多種多彩になっていく。ここでは古墳時代の玉飾りの組み合わせの推移を前期・中期・後期に分けてみていきたい。

2. 古墳時代前期—碧い玉の時代

古墳時代前期（3世紀半ば～4世紀後半）の玉類の組み合わせは、ヒスイ製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉が主体となり、彩りは碧を基調としている。この組み合わせが顕著になってくるのは、古墳時代前期前半でもやや新しい段階（3世紀末～4世紀初め）であり、碧玉（緑色凝灰岩）製の腕輪形石製品の登場と時を同じくする。奈良県では、桜井茶白山古墳や下池山古墳といった王権の中核に所在した古墳にみられ、新たな副葬品のアイテムとしてこの段階に整えられたと思われる（図1・2）。背景には、腕輪形石製品とヒスイ製勾玉と碧玉（緑色凝灰岩）製管玉の産地である北陸地方から近畿中央部（王権中核）を介して、各地の古墳がこれらを受容する流通機構が整備されたことが考えられる（表1）。

前期後半（4世紀半ば～後半）には、碧い玉の組み合わせに異なる色彩が加わる。「出雲ブランド」と称される島根県花仙山周辺で産出する碧玉・メノウ・水晶で作られた勾玉である。奈良県新沢千塚500号墳から、その古い事例である複数のメノウ製・水晶製勾玉がヒスイ製勾玉とともに出土している（図3）。基調となっていた碧い玉に赤と白（透明）の玉が加わって色調豊かになり、次項でみる中期（4世紀末～5世紀末）の玉類に引き継がれていく（表2）。

3. 古墳時代中期—多彩な玉の時代

中期の玉類の組み合わせは、器種における勾玉、管玉、小玉のセット関係は踏襲されるが、勾玉の材質の主体は、ヒスイ製から山陰系の碧玉製またはメノウ製へ、さらにこの段階で増加する滑石製など多様化する。加えて金属製玉類、色調豊かなガラス玉が出現する。また中期後半（5世紀後半～末）にはコハク製玉類も増加する。滑石製玉類は、加工しやすい素材であるため、勾玉以外に、管玉、白玉、棗玉、算盤玉など

多様な器種に用いられる。中小規模の古墳だけではなく、奈良県島の山古墳・室宮山古墳などの巨大前方後円墳にも大量に副葬されている（図4・5）。用途も拡大し、装身具のほかに、古墳築造から埋葬の過程での様々な場面で用いられる。金属製玉類は、中期前半～中葉頃に金製・銀製空丸玉がまず出現するが、当初は奈良県赤尾熊ヶ谷3号墳例や兵庫県宮山古墳例のように、石製・ガラス製玉類の連のなかのアクセントとして加わるようである（図8）。一方で、奈良県新沢千塚126号墳例のように多数の銀製空丸玉を連ねたものがあり、後期古墳にみられるこのような事例の先駆的存在である（図6・7）。

4. 古墳時代後期—金色の玉の時代

古墳時代後期（6世紀）においては、中期では点的であった金属製玉類がより広範に普及する（表3）。碧玉製管玉とガラス製小玉のセットに金属製玉類（空丸玉）が組み合うものが比較的多くみられる。奈良県の事例ではここに勾玉はあまり組み合わさず、金属空丸玉が親玉となっていた可能性がある（図9）。このような金属製玉類のセットに影響されたのか、勾玉を用いず、ガラス製小玉・丸玉、碧玉製管玉、水晶切子玉・丸玉、土製丸玉、コハク・埋木棗玉、あるいは勾玉以外のメノウ・碧玉製玉等の組み合わせで構成される連もみられる（図10）。これらがこの段階の最新モードになっていた可能性がある。一方で中期から継続して、多様な材質の勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉の基本セットに水晶製切子玉・算盤玉、コハク製棗玉、土製丸玉などが加わり、基本セットプラスαの組み合わせのバリエーションが最も豊富にみられる時期となる（図11）。これは群集墳の活発な造営にともなって玉類を副葬する古墳が増加し、多様な組み合わせが展開していったためと考えられる。ただし上記の組み合わせに滑石製玉類が加わることはほとんど無くなり、古墳副葬において急速に衰退する。後期後半には西日本の有力古墳から石製の玉が消滅し、奈良県藤ノ木古墳・牧野古墳のように金属製玉類とガラス製玉類のみ用いられる（図12・13）。また群集墳からも徐々に石製の玉は減少していくようである（図14）。

挿図出典

図6・7：『平成26年度夏季特別展 新沢千塚』歴史に憩う橿原市博物館 図録第2冊 2014年から一部改変し作成。

図8：『国指定重要文化財 宮山古墳出土品』姫路市教育委員会 2016年

その他の挿図は、奈良県立橿原考古学研究所及び附属博物館刊行の報告書・図録等から一部改変して作成した。

表1 古墳時代前期玉類副葬開始段階の様相
 (「古墳時代の玉類」14県データベースより作成、表2・3も同じ)

県名	古墳名	出土遺構	時期	材質	器種	点数	使用法
埼玉県	小仙波4丁目遺跡 2号方形周溝墓	主体部	前期前半	ガラス	小玉	3	
				碧玉	管玉	1	
石川県	国分尼塚1号墳 和田山9号墳	埋葬施設 (割竹形木棺) 主体部	漆町7群 (前期前半) 集成1期 (前期前半)	ヒスイ	異形勾玉	1	
				碧玉	管玉	10	
				ヒスイ	勾玉	1	
福井県	花野谷1号墳	第1埋葬施設	前期	ヒスイ	勾玉	1	連、頸飾り
				碧玉	管玉	25	
				メノウ	小玉	1	
				ガラス	小玉	146	
三重県	志氏神社古墳 八重田1号墳	不明 西木棺	前期後半	ヒスイ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	2	
				ガラス	小玉	4	
				ヒスイ	勾玉	1	
兵庫県	龍子三ツ塚1号墳 森尾古墳	竪穴式石槨	3世紀後半 前期	ヒスイ	勾玉	1	装身具
				緑色凝灰岩	管玉	1	
				碧玉	管玉	5	
				硬玉	勾玉	1	
				ガラス	勾玉	2	
				碧玉	管玉	25	
奈良県	下池山古墳 桜井茶臼山古墳	竪穴式石室	前期前半	ヒスイ	勾玉	2	
				碧玉	管玉	7	
				ガラス	小玉	44	
				ヒスイ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	13	
				ガラス	小玉	12	
和歌山県	下里古墳	竪穴式石室	前期	碧玉	玉杖	1	
				碧玉	管玉	7	
				ガラス	小玉	56	
				ヒスイ	勾玉	1	
鳥取県	六部山46号墳 馬の山4号墳	第1主体部 (竪穴式石室)	前期	ヒスイ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	9	
				緑色凝灰岩	管玉	3	
				ガラス	小玉	10	
島根県	五反田1号墳	第1主体部	前期末	ヒスイ	勾玉	2	
				碧玉	管玉	1	
				緑色凝灰岩	管玉	17	
岡山県	殿山11号墳 用木4号墳	第4主体部 第11主体部 (土坑墓)	古・前・I ~II (前期前半) 古墳初頭	ヒスイ	勾玉	2	連、頸飾り
				碧玉	管玉	1	
				緑色凝灰岩	管玉	11	
				ガラス	管玉	2	
広島県	尾ノ上古墳 大迫山第1号古墳	竪穴式石室	4C 4C中葉	ヒスイ	勾玉	2	
				緑色凝灰岩	管玉	11	
				ガラス	小玉	186	
				ヒスイ	勾玉	1	
福岡県	那珂八幡古墳 光正寺古墳	第二主体部 (木棺墓) 第一主体部 (箱式石棺)	前期 3世紀後半 ~末	硬玉	勾玉	1	
				碧玉	管玉	2	
				ガラス	小玉	1	
佐賀県	西一本杉遺跡 ST009 小隈古墳	木棺直葬 1号箱式石棺	4C後半 前期	ヒスイ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	14	
				ガラス	小玉	40	
				ヒスイ	勾玉	1	
宮崎県	西都原13号墳	粘土槨	4世紀中頃 ~後半	ヒスイ	勾玉	2	
				碧玉	管玉	34	
				ガラス	小玉	149	

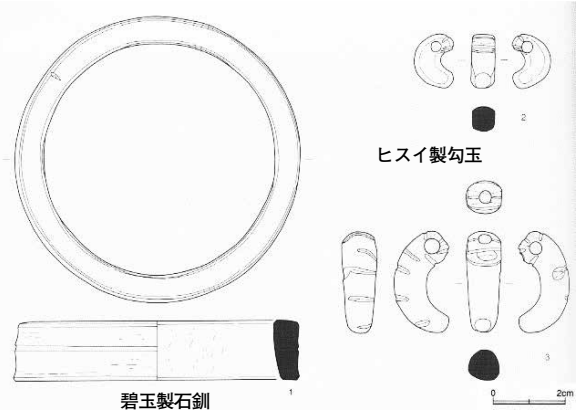


図1 下池山古墳出土玉類と石釧

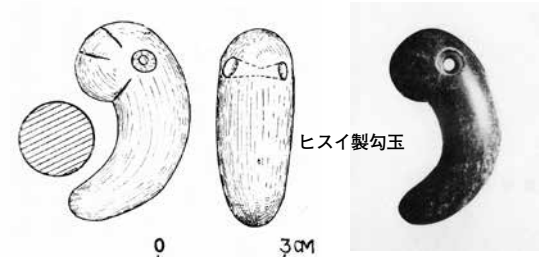


図2 桜井茶臼山古墳出土玉類と腕輪形石製品

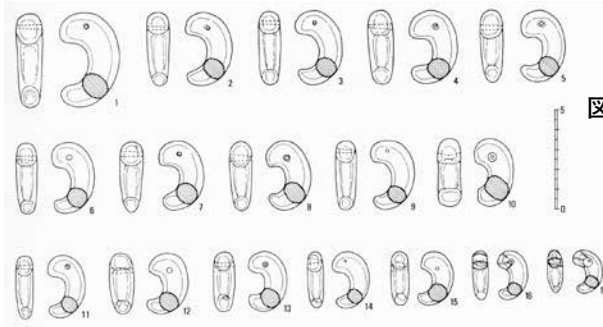


図3 新沢千塚500号墳出土玉類

1~9・11:メノウ製勾玉
 12~15:水晶製勾玉
 10・16・17:ヒスイ製勾玉

表2 古墳時代出雲系玉類出現段階の様相 (アミ掛け部分は出雲系玉類)

県名	遺跡名	出土遺構	時期	材質	器種	点数	使用法
埼玉県	蜻蛉遺跡 3号方形周溝墓	方形周溝墓	前期	メノウ	勾玉	1	
				メノウ	切り玉	1	
	神明ヶ谷戸古墳	木棺直葬	前期後半	滑石	管玉	2	
				滑石	小玉	2	
				水晶	勾玉	1	
石川県	北吉田ノノメ3号墳	埋葬施設 (木棺)	中期前半	メノウ	勾玉	1	頸飾り
				滑石	勾玉	3	
				コハク	丸玉	1	
				滑石	算盤玉	5	
				ガラス	小玉	2	
				滑石	臼玉	27	
				硬玉	勾玉	1	
				碧玉	勾玉	5	
				鉄石英	管玉	1	
				碧玉	管玉	32	
福井県	西山第3号墳		前期	水晶	丸玉	1	
				ガラス	丸玉	1	
				ガラス	小玉	17	
				ヒスイ	勾玉	1	
				コハク	勾玉	1	
三重県	上椎ノ木1号墳	粘土槨(棺内)	前期末	メノウ	勾玉	3	連、頸飾り
				メノウ	勾玉	3	
				ガラス	小玉	37	
兵庫県	新宮東山2号墳	4号棺 (割竹形木棺)	4世紀	メノウ	勾玉	2	装身具
				ガラス	管玉	9	
	西野山3号墳	粘土槨	前期末	ガラス	小玉	173	
				滑石	臼玉	5	
				ヒスイ	勾玉	1	
奈良県	新沢千塚500号墳	主槨(粘土槨)	前期後半	ヒスイ	勾玉	1	頸飾り
				碧玉	管玉	83	
				水晶	切り玉	6	
				水晶	丸玉	2	
				メノウ	勾玉	9	
	池ノ内5号墳	木棺直葬 (第2棺)棺内	前期後半	水晶	勾玉	4	
				ヒスイ	勾玉	3	
				碧玉	管玉	101	
				ガラス	小玉	530	
				ガラス	丸玉	1	
和歌山県	尾ノ崎15号墳		4C	メノウ	勾玉	2	
				碧玉	管玉	25	
				碧玉	管玉	2	
				ガラス	小玉	64	
鳥取県	新井南谷3号墳	第3主体	前期	蛇紋岩	勾玉	1	
				水晶	勾玉	1	
				ヒスイ	勾玉	3	
	印賀7号墳	第1埋葬	前期	ガラス	小玉	7	
				碧玉	管玉	24	
				緑色凝灰岩	管玉	3	
				メノウ	勾玉	2	
島根県	石田古墳	主体部	前期末	碧玉	管玉	1	
				緑色凝灰岩	管玉	5	
				蛇紋岩	管玉	1	
				ガラス	小玉	55	
				ヒスイ	勾玉	2	
	奥才34号墳		前期後半	碧玉	管玉	6	
				メノウ	勾玉	2	
				ひん岩	垂玉	1	
				細粒酸性凝灰岩	垂玉	3	
				細粒酸性凝灰岩	小玉	160	
岡山県	鶴山丸山古墳	棺内	前期後半	碧玉	勾玉	1	
				碧玉	管玉	4	
				水晶	勾玉	1	
広島県	山の神第1号古墳 (2号主体部)	前期後半	滑石	勾玉	2		
			水晶	勾玉	1		
	才が迫第1号古墳	竪穴式石室	4C初~末	碧玉	管玉	8	
				ガラス	小玉	54	
				メノウ	勾玉	1	
福岡県	妙法寺2号墳	第一主体 割竹形木棺	4世紀中葉	ヒスイ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	12	
	忠隈1号墳	竪穴式石室	前期	緑色凝灰岩	管玉	3	
				碧玉	勾玉	1	
佐賀県	熊本山古墳	舟形石棺	前期	滑石	管玉	4	
				碧玉	管玉	1	
				水晶	管玉	1	
宮崎県	下屋敷古墳	木棺直葬?	前期	ヒスイ	勾玉	1	
				メノウ	勾玉	1	
				碧玉	管玉	18	
				ガラス	小玉	162	
				コハク	勾玉	1	
				水晶	勾玉	1	
				碧玉	管玉	6	
				ガラス	小玉	2	

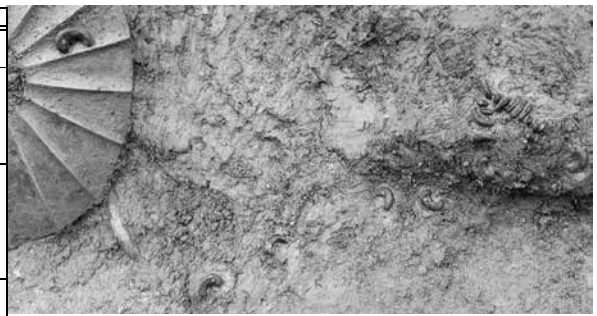


図4 島の山古墳前方部粘土槨被覆粘土中の滑石製勾玉

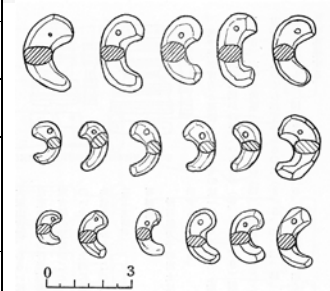
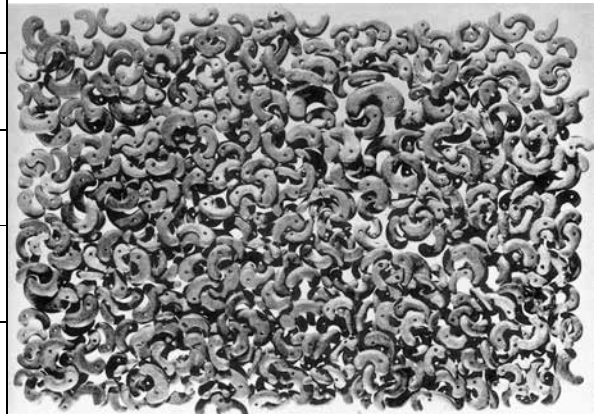


図5 室宮山古墳石室内外から出土した滑石製勾玉



図6 新沢千塚126号墳出土金製空丸玉(中央左の2点)・銀製空丸玉復元品

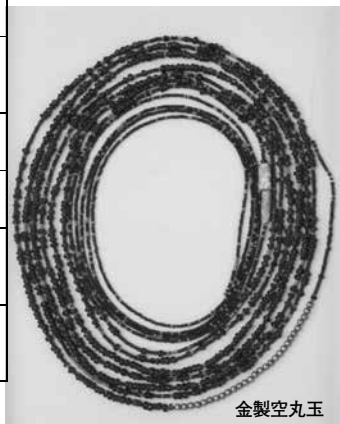


図8 宮山古墳第3主体部出土金製空丸玉、ガラス製小玉・管玉

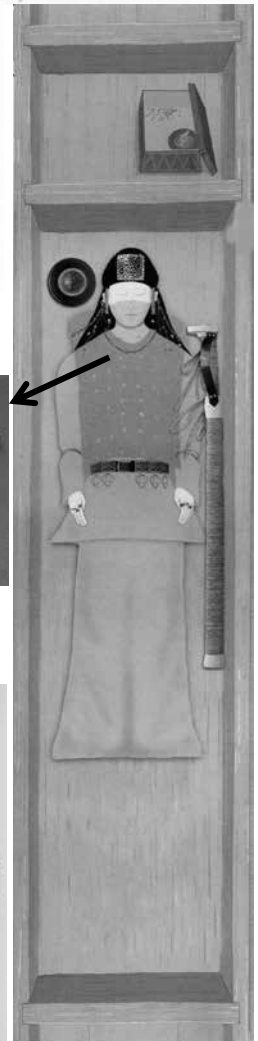


図7 新沢千塚126号墳埋葬施設復元イメージ

表3 古墳時代の金属製玉類

県名	材質	金製	銀製鍍金	金銅製	銀製	銅製	その他	小計	時期
埼玉県		勾玉1、平玉35	—	三輪玉3、空玉1	空玉3	空玉2	—	45(3古墳から)	後期
石川県		—	—	空玉12	空玉2	—	—	14(3古墳から)	中期中葉(金銅製空玉12)、終末期(銀製空玉2)
福井県		—	—	三輪玉6、空玉3	空玉1	—	—	10(4古墳から)	中期(金銅製三輪玉5)、他は後期
三重県		—	—	空玉4	空玉37、小玉8、平玉5、梔子玉1	小玉7	錫丸玉1	63(14古墳から)	後期～終末期
兵庫県		空玉28	梔子玉39	空玉4	空玉23、梔子玉2、	勾玉1、三輪玉1	—	98(15古墳から)	中期前半(金製空玉)、他は後期～終末期
奈良県		空玉12	勾玉127、丸玉71、梔子玉54、有段空玉48	空玉18、梔子玉12	空玉201、半球形空玉57、有段空玉25、ガラス装飾付勾玉7、梔子玉6、霰玉3	三輪玉2	材質不明11	654(42古墳から)	中期前半(銀製空玉3)、中期中葉(金製空玉2、銀製空玉40)、他は中期末～終末期
和歌山県		勾玉1、丸玉1	梔子玉25、丸玉1	—	空玉29、梔子玉8、六角形空玉1、車輪形空玉2	勾玉1、丸玉1	—	70(13古墳から)	中期後半(金製勾玉1)、他は後期
鳥取県		—	—	三輪玉3	—	—	—	3(1古墳から)	後期
島根県		—	—	空玉32、霰玉21、梔子玉2、三輪玉4	—	—	—	59(5古墳から)	中期中葉(金銅製空玉3)、他は後期
岡山県		—	—	—	空玉28	空玉2	—	30(5古墳から)	中期末～後期
広島県		—	—	丸玉2、三輪玉1	梔子玉1	—	—	4(3古墳から)	中期後半(三輪玉1)、他は後期
福岡県		—	—	空玉10、三輪玉12	空玉101、梔子玉12、鈴玉26	空玉4、	銅地銀張空玉1、鉛空玉4、鉄製空玉2	172(44古墳から)	中期中葉(金銅製三輪玉6、銀製空玉13)、他は中期後半～終末期
佐賀県		—	—	—	小玉4	—	丸玉1、鉛製丸玉1	6(3古墳から)	後期
宮崎県		—	—	—	空玉4	—	—	4(1古墳から)	不明



図9 新沢千塚272号墳出土玉類



図10 割塚古墳出土玉類



図11 新沢千塚323号墳出土玉類



図12 藤ノ木古墳石棺内遺物出土状況

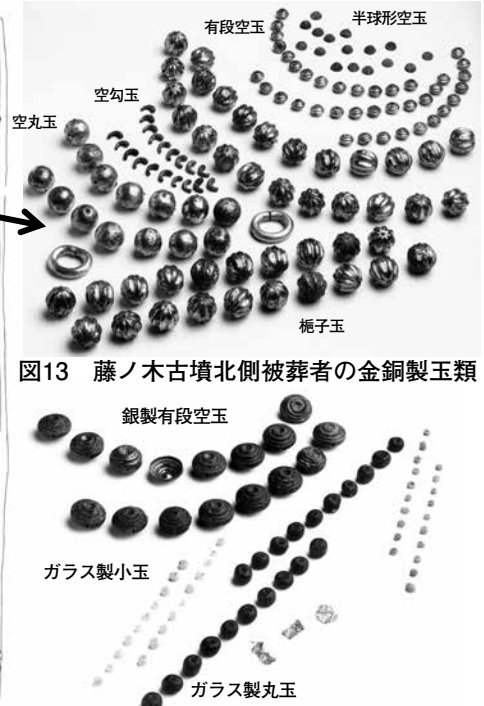


図13 藤ノ木古墳北側被葬者の金銅製玉類

図14 小山2号墳出土玉類

古墳時代の玉飾り

三重県

(三重県埋蔵文化財センター 石井 智大)

1. 古墳時代の玉飾りの種類

古墳時代の玉飾りには、玉を飾りの主体として用い直接身に付けて装飾するもの（装身具）と、玉を部分的な飾りとして他の器物に取り付けて装飾としたもの（器物飾り）がある。

装身具は、身体に装着する位置によって、以下のよう大きく分類できる。

①頸飾り：頸に下げるネックレス状のものである。一連が長く、頸からぶら下げるようなもの（垂飾式）と、頸に短く巻き付けるもの（頸巻式）がある。垂飾式は、胸の位置に飾りがくるため、胸飾りともいえる。大型の勾玉や垂飾がペンダントトップとして中心に付けられているものも多い。垂飾式・頸巻式ともに数重に巻かれることがあり、奈良県島の山古墳のように三重に巻く例もある。人物埴輪に表現された頸巻式の例では、二重に巻くものがみられる。

②頭飾り：美豆良に着けた美豆良飾りと、それ以外のものに分けられる。奈良県藤ノ木古墳では、美豆良にガラス玉を連ねたものを巻き付けているほか、ガラス玉を連ねた先に銀製剣菱形垂飾を付けたものを美豆良から数条垂らす飾りが出土している。

美豆良飾り以外では、藤ノ木古墳で後頭部からガラス玉を連ねたものを簾状に垂らす例がある。他にも、布等を鉢巻き状にして玉を縫い付けたものや、布に玉を縫い付けて被るような頭飾りの存在が推定されている。

③耳飾り：耳に吊り下げるか、巻き付けるものである。基本的に両耳に着けたようである。大阪府富木車塚古墳では、金属製の耳環とともにガラス玉が出土し、耳環から垂らしたか、耳に巻き付けたものと推定される。また、金銅製垂飾付耳飾りの装飾の一部として、ガラス玉が使われている例もある。

④手飾り：手首にブレスレット状に巻く手玉がある。両手首に巻く例が多い。一重のものだけでなく、三重

県東条1号墳のように、ガラス玉を多数連ねたものを、二・三重に巻き付けたと考えられる例もある。

⑤足飾り：足首に巻く足玉がある。足への装着が確実な例は島根県上島古墳などごく少数だが、埴輪にも足玉の表現がある。他にもいくつか古墳被葬者の足付近から玉が出土した例があり、足玉の他に服の裾を縛る足結いの玉飾りもあったと推定されている。

器物飾りとしては、主にガラス玉が使用された。金属製品と組み合わせて用いられることが多く、刀装具、飾履、冠、馬具などに嵌め込まれた例がある。刀装具には、水晶製や金属製の三輪玉も使われている。また、ガラス小玉をつなぎ合わせて作られた玉枕のような玉繋ぎ製品もある。

2. 時期的な変化

弥生時代にはすでに頸飾り、頭飾り、耳飾り、手飾りなど、様々な玉飾りが使われている。器物飾りとして、銅剣の鞘や土器に玉を嵌め込んだ例もある。

古墳時代になると、各地での玉の生産や流通の活発化にも支えられ、玉飾りは使われる玉の種類・形態ともに多様化していく。

古墳時代前期には、頸飾りにはヒスイ製勾玉や碧玉製管玉など、緑色系の石製玉類が多く使われる。この傾向は手飾りにもみられる。

中期後半以降には、主に朝鮮半島からの影響の下、玉飾りにも大きな変化がみられる。装身具としては金属製の玉が普及していき、頸飾りや手飾りなどに用いられる。また、金属製品の器物飾りとしてガラス玉が使われている例もみられるようになる。

終末期には、勾玉や管玉、切子玉など石製の大型玉類は減少し、主にガラス玉や金属製玉類が頸飾りに使われる。奈良時代にも玉の頸飾りや手飾りがあるが、玉は冠帽や帯などの装飾としての使用が多い。

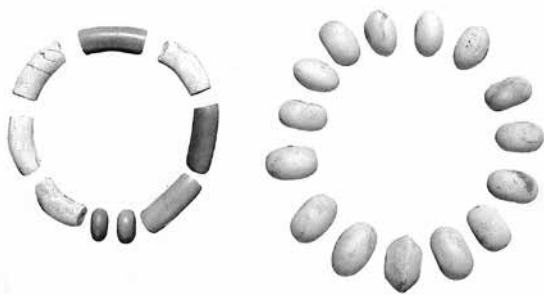
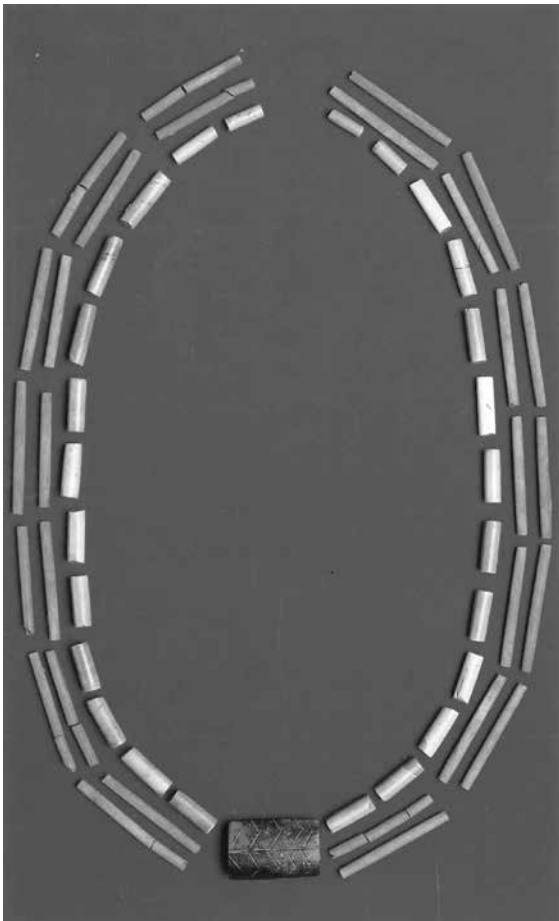


図1 奈良県島の山古墳の頸飾り・手飾り

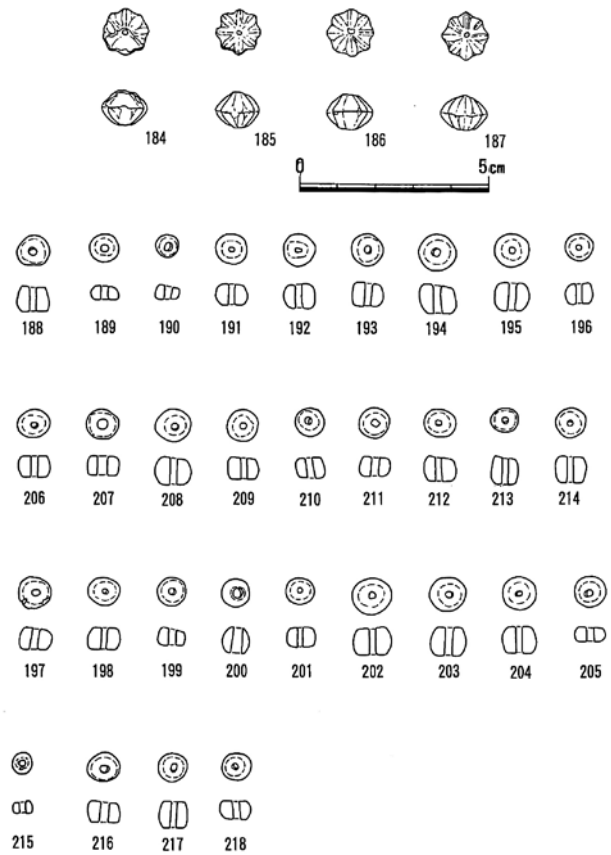
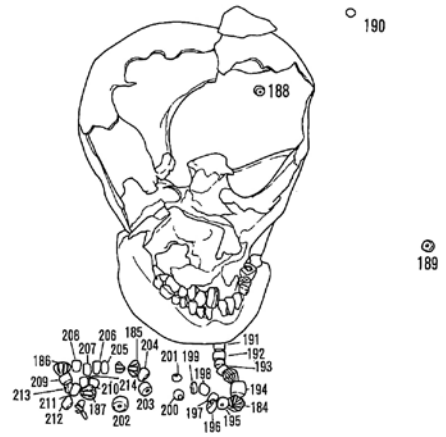


図2 三重県金塚2号横穴墓の頸飾り



図3 大阪府富木車塚古墳の耳飾り



図4 三重県東条1号墳の頸飾り・手飾り

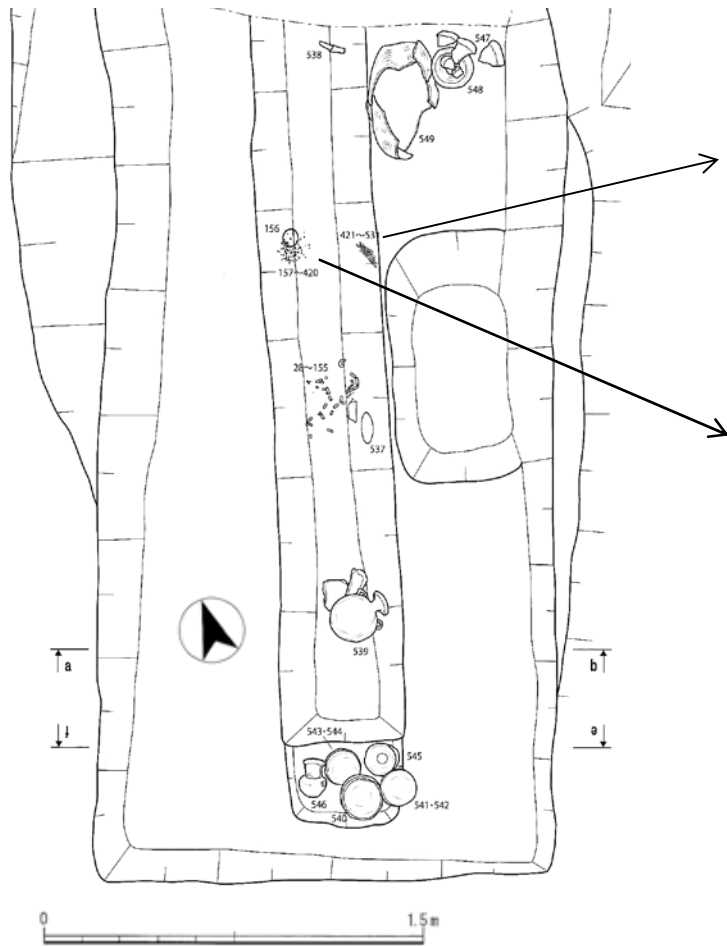


図5 三重県東条1号墳玉類出土状況

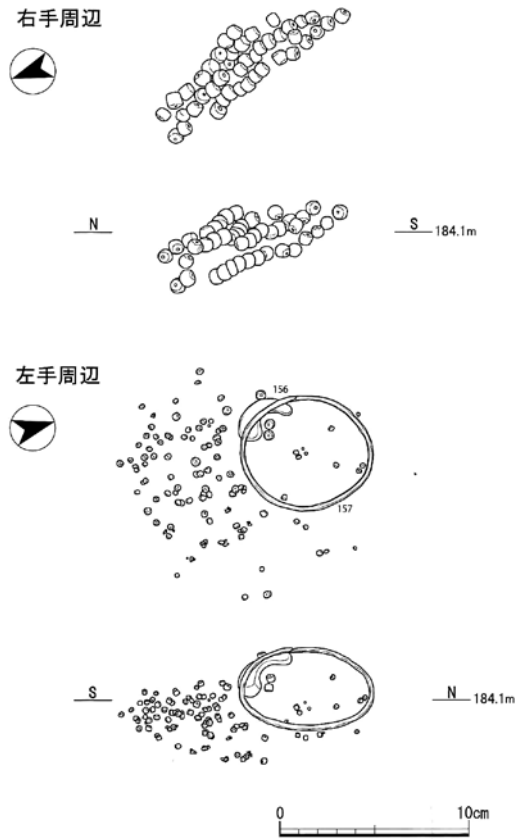


図6 東条1号墳の手飾り出土状況

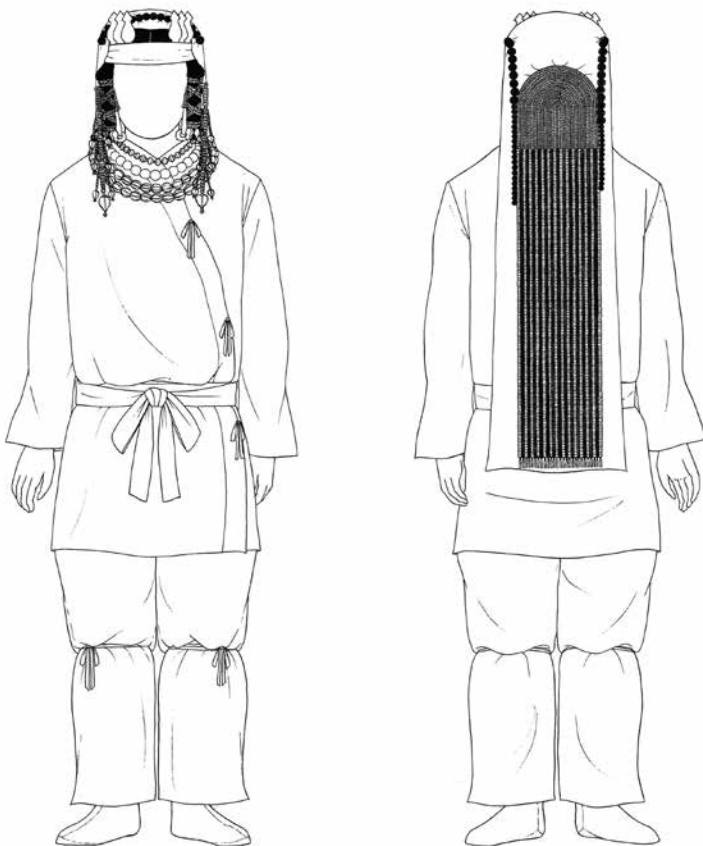


図7 奈良県藤ノ木古墳北側被葬者の装身具復元

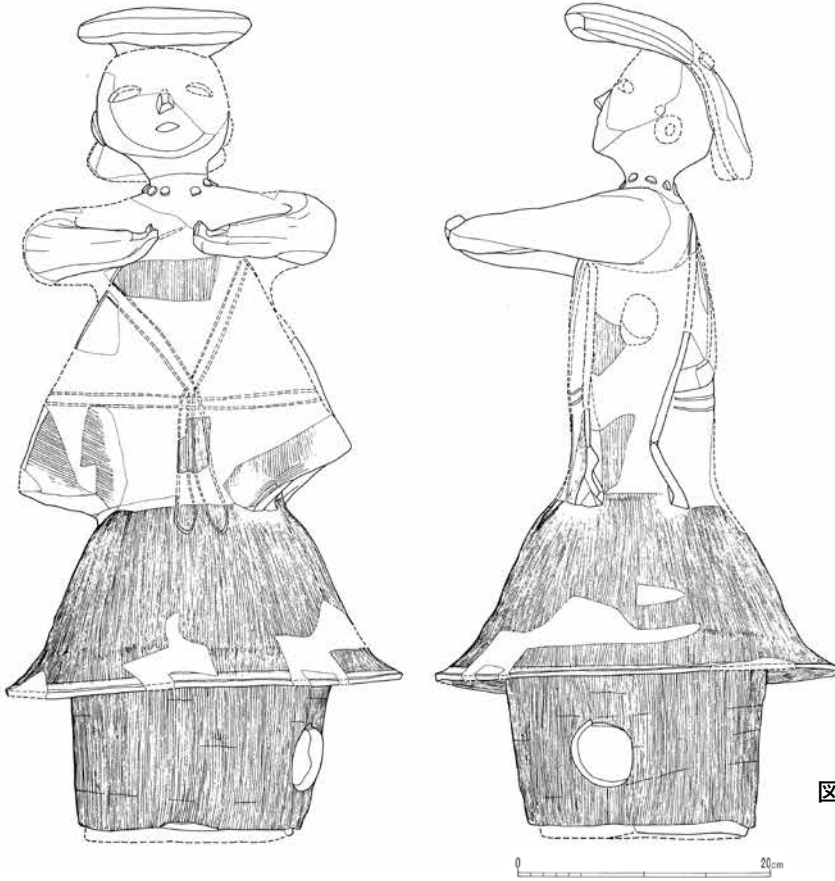


図9 茨城県大平1号墳の
埴輪の耳飾り表現

図8 三重県常光坊谷4号墳の
埴輪の頸飾り表現

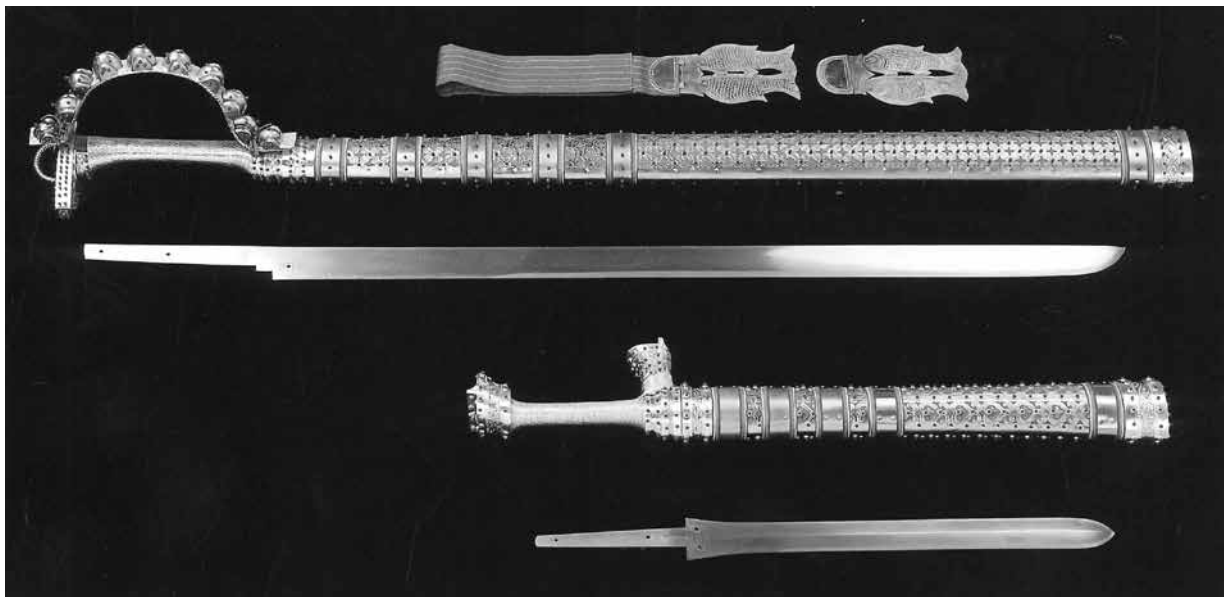


図10 藤ノ木古墳のガラス玉で飾った刀剣装具



主要参考文献

『黄泉のアクセサリ』平成15年度春季特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館2003年、『金の輝き、ガラスの煌めき』秋季特別展 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2007年、玉城一枝「足玉考」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV 同志社大学考古学シリーズ刊行会1992年、玉城一枝「手玉考」『橿原考古学研究所論集』第12号 吉川弘文館1994年、町田章『古墳時代の装身具』日本の美術第371号 至文堂1997年

挿図出典

図1：『政権交替』秋季特別展 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2002年、図2：『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2002年、図3：大阪府立近つ飛鳥博物館2003年、図4～6：『東条1号墳・屋敷の下遺跡』三重県埋蔵文化財センター2015年、図7・10：『斑鳩藤ノ木古墳 第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所1993年・同附属博物館2007年、図8：『中部平成台団地埋蔵文化財発掘調査報告書』松阪市教育委員会1990年、図9：『茨城の形象埴輪』学術調査報告書VII 茨城県立歴史館2004年

権威を表す玉飾り

広島県

(広島県立歴史博物館 尾崎 光伸)

1. はじめに

古墳に副葬された玉は単なる装飾品ではなく、何らかの形で被葬者の権威を表していると考えられる。ここでは、被葬者の階層性が副葬された玉類にどう反映しているか、中央と地方の様相を比較することで概観したい。

2. 広島県に見る副葬された玉類の階層性

表1は、玉類が副葬された広島県の前期古墳・墳墓である。これを見ると、管玉・ガラス小玉はほぼ全ての古墳・墳墓で出土しているが、勾玉は全長または径20m以上の古墳（各地域における首長墓）を中心に出土しており、階層性は勾玉に表れることが分かる。勾玉の石材は、メノウや碧玉、水晶などもあるが、ヒスイ製の勾玉が最も多く見られ、大きな古墳の被葬者はヒスイ製勾玉を選択的に入手していたことが窺える。このような傾向が、大和政権の中核でも見ることができるか、見てみよう。

3. 奈良県に見るヒスイ製勾玉

畿内地域では、弥生時代には、墳墓に玉類はほとんど副葬されない。こうした伝統は古墳時代初頭まで続いていたようで、纏向古墳群のホケノ山古墳、柳本古墳群の黒塚古墳、大和古墳群の中山大塚古墳からは玉類が出土しておらず、この時期、この地域の首長墓では、玉類副葬がまだ一般化していないことが分かる。

こうした中でいち早く玉類の副葬を始めたのは奈良盆地東南部地域で、赤尾熊ヶ谷2号墳（布留1式期）、見田・大沢古墳群2号墳（布留式古相）、同4号墳（庄内期？）ではヒスイ製勾玉・碧玉製管玉・ガラス小玉が出土しており、いち早く玉類副葬を取り入れた状況が窺える。

この地域では、前期前葉頃、桜井茶白山古墳・メスリ山古墳などの大型前方後円墳で玉類副葬が行われているが、いずれもヒスイ製勾玉については孔を中心に放射状に刻み目を施した「丁字頭勾玉」と呼ばれるものが見られる。その一方で、周辺の中・小型の古墳を見ると、池ノ内1号墳（円墳13×11m）、池ノ内5号墳（円墳17m）、赤尾熊ヶ谷2号墳（方墳14×16m）、双築1号墳（円墳30m）ではヒスイ製丁字頭勾玉が見られない。

その後、前期中葉から後葉にかけて、奈良盆地各所

では、ヒスイ製の丁字頭勾玉が出土する古墳が、特に表2に見られるような首長墓で出土が認められ、こうした点に階層性が表れている可能性がある。

4. 丁字頭勾玉とは

丁字頭勾玉は弥生時代中期から後期にかけて、北部九州などの地域で盛行し、主にはヒスイ製とガラス製のものがある。また、瀬戸内地方では、弥生時代後期後葉には岡山県楯築遺跡（墳丘墓）からヒスイ製勾玉・土製勾玉に丁字頭のものが出土している。

弥生時代の丁字頭勾玉の持つ意味について、木下尚子氏は、孔を中心に放射状に施した刻み目が紐を掛けたような表現となっていることに注目し、「何かを縛り込めることへの呪術性」を読み取る。

これが古墳時代にどう受け継がれたかは明らかではない。北部九州で盛行した丁字頭勾玉は古墳時代になると下火となる一方、畿内の首長墓で新たに採用されるようになる。その背景については今後の課題である。

5. 中・後期の石製勾玉と金属製玉類

中・後期にどのような玉類が権威を表象していたかは、この時期の首長墓の発掘調査例が少なく、明らかではない。ただ、前期に権威の象徴であった丁字頭勾玉については、中期になるとヒスイだけでなく滑石や碧玉など多様な石材が用いられ、また小規模な古墳からも出土するようになるなど、よりランクの下がった扱いが認められるようになる。さらに、後期になると、丁字頭勾玉はほとんど見られなくなる。

これに代わり、中期以降、新たな権威の象徴となるのは、銀製空玉などの金属製玉類と見られる。石製勾玉から金属製玉類への権威が移っていった様相について、特に後期の様相を中央（奈良県）と地方（広島県）を比較してみると、例えば、奈良県で横穴式石室などから出土した遺物をみると、その多くがガラス小玉と金属製空玉であり、勾玉は約14%の古墳でしか出土していない。その一方で、広島県では約47%の古墳から勾玉が出土している。石製勾玉に対する権威自体がなくなるとともに、中央で廃れた慣習が地方ではまだ残っている状況を示しているものと思われる。

参考文献

木下尚子「弥生定形勾玉考」『東アジアの考古と歴史』1987年

表 1 広島県の古墳時代前期古墳・墳墓出土の玉類

地域	遺跡名	墳形	墳丘規模	遺構	勾玉					管玉		小玉	その他
					ヒスイ	メノウ	コハク	碧玉	水晶	碧玉	緑色凝灰岩	ガラス	
広島湾岸	中小田第1号古墳	前方後円墳	28.5m		○					○		○	勾玉(紫水晶), 算盤玉(水晶), 車輪石(緑色凝灰岩)
	神宮山第1号古墳	前方後円墳	28m	第2主体部	○					○		○	算盤玉(水晶), 管玉(メノウ)
	中小田第2号古墳	円墳	20m							○			
	大明地遺跡第1号古墳	方墳	15×15m								○	○	石釧(凝灰岩)
	上安井古墳	円墳	15m							○		○	
	成岡A地点遺跡第3号古墳	楕円墳	9×7m							○		○	
東広島	芳ヶ谷第1号古墳	方墳	8×8m				○				○	○	
	才が迫第1号古墳	方墳	11.2×9.5m		○	○				○		○	
安芸北部	入野中山遺跡第2号古墳	方墳	5×7m	SK24	○					○	○		
	中出勝負峠第8号古墳	円墳	15m							○		○	
備後南部	尾ノ上古墳	前方後円墳	60m		○						○	○	
	石鎚山第1号古墳	円墳	20m		○		○			○		○	
	城山B遺跡第2号古墳	楕円墳	12.5×8m							○		○	
	山の神第1号古墳	円墳	12m					○		○		○	
	山の神第3号古墳	方墳	8.2×7.7m							○		○	
	加茂倉田遺跡	墳墓		3号箱式石棺						○		○	
	才町茶臼山遺跡	墳墓		SK2		○				○		○	
	門田A遺跡	墳墓		SK47						○		○	
備後北部	辰の口古墳	前方後円墳	77m							○		○	
	大迫山第1号古墳	前方後円墳	45.5m		○					○		○	



図 1 広島県の玉類が出土した古墳時代前期古墳・墳墓

表2 奈良県の古墳時代前期中～後葉の主な首長墓

古墳名	地域	古墳群	墳形	墳長	勾玉				丁字頭 の有無	管玉		小玉 ガラス	霏玉 ヒスイ
					ヒスイ	水晶	メノウ	滑石		碧玉	緑色凝灰岩		
メスリ山古墳	盆地南東部		前方後円墳	250	○				○	○			
東大寺山古墳	盆地東部	榛本古墳群	前方後円墳	140	○				○	○	○?	○	
新山古墳	盆地西部	馬見古墳群	前方後方墳	137	石材不明				○	○			
佐味田宝塚古墳	盆地西部	馬見古墳群	前方後円墳	111	○			○	○	○			
富雄丸山古墳	盆地北西部		円墳	90					×	○			
新沢千塚500号古墳	盆地南部	新沢千塚古墳群	前方後円墳	62	○	○	○		○	○		○	
鴨都波1号古墳	盆地南西部		方墳	19×14	○				○	○		○	

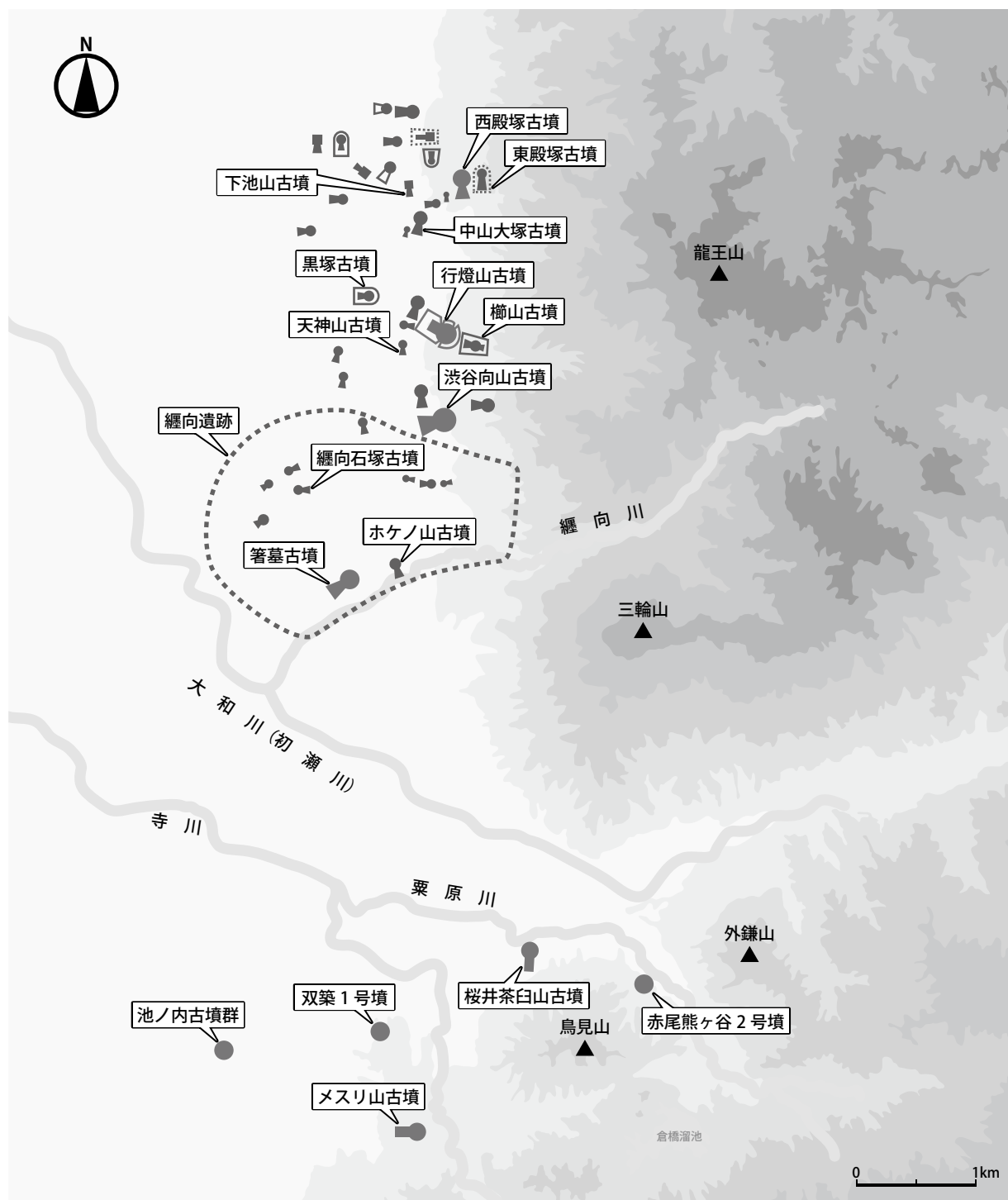
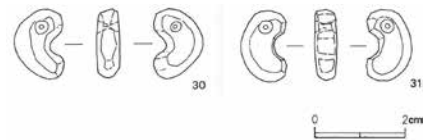
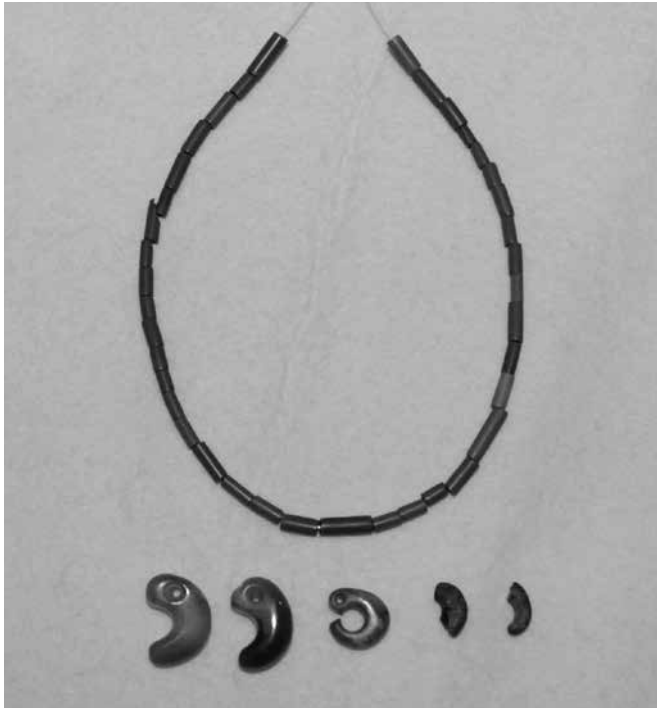
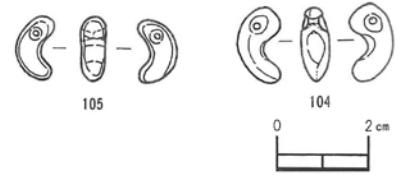


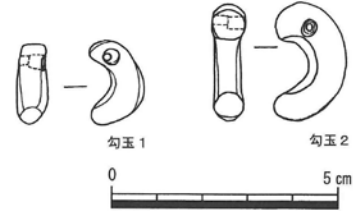
図2 奈良県（奈良盆地東南部）の古墳時代前期の主な古墳



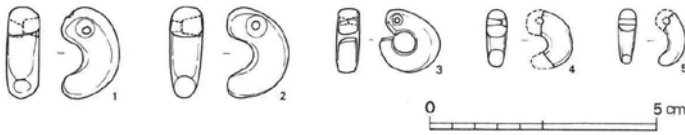
才が迫第1号古墳出土 勾玉



才町茶臼山古墳出土 勾玉



尾ノ上古墳出土 勾玉

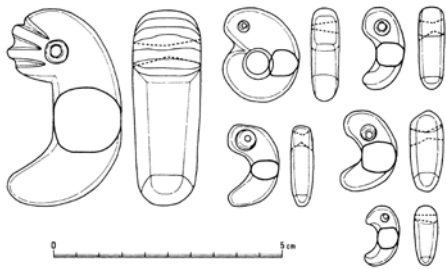


石鎚山第1号古墳出土 勾玉（ヒスイ・コハク製）、管玉

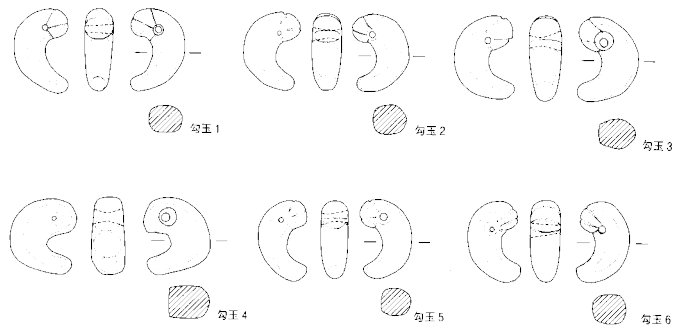
挿図出典

『石鎚山古墳群』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター1981年、『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(IX)』(財)広島県埋蔵文化財調査センター1993年、『才町茶臼山遺跡』福山市教育委員会・才町茶臼山遺跡発掘調査団編 1999年、『尾ノ上古墳』福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団 1999年

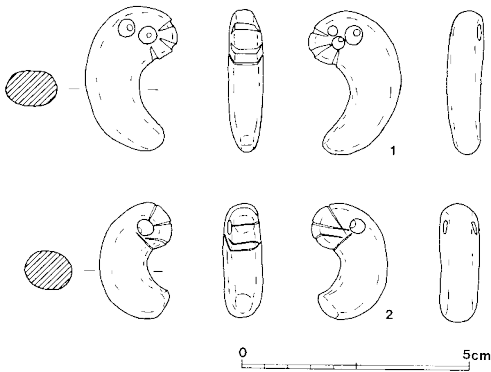
図3 広島県出土の玉類



メスリ山古墳出土 勾玉



鴨都波1号墳出土 勾玉・素玉・小玉



東大寺山古墳出土 勾玉

挿図出典

『メスリ山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第35冊 奈良県立橿原考古学研究所編・奈良県教育委員会 1977年、『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会ほか 2010年、『鴨都波1号墳調査概報』御所市教育委員会編・学生社 2001年

図4 奈良県出土の玉類（勾玉を中心に）

玉類の組み合わせ

佐賀県

(佐賀県教育庁文化財課 瀧ノ上 隆介)

1. はじめに

北部九州に位置する佐賀県は、北は玄界灘を介して朝鮮半島と近接し、南は有明海を介して中九州、南九州へとつながる。朝鮮半島と近接するという地理的優位性から、玉類の副葬に関しても、特に古墳時代後期において外来系の要素が色濃くみられる。また、佐賀県南部の有明海沿岸地域では、有明海を介したネットワークが形成され、独自の古墳文化圏を形成している地域でもある。

本稿では、まず佐賀県における玉類の組み合わせと変遷を概観し、その後各県の集成結果をもとに玉類使用にみられる組み合わせについて整理したい。

2. 佐賀県の玉類の組み合わせと変遷

玄界灘沿岸の唐津地域において、古墳時代前期初頭に位置付けられる唐津市久里双水古墳^{くりそうずい}では、玉類の副葬が顕著ではなく、わずかに碧玉製管玉2点のみの出土である。前期末～中期初頭に位置付けられる唐津市谷口古墳では、11点にも及ぶ腕輪形石製品の多量副葬と合わせて、ヒスイ製勾玉5点、ガラス製勾玉3点、碧玉製管玉292点、ガラス製小玉1553点という多量の玉類が副葬されており、近畿中枢部と連動した傾向を示している。また、佐賀平野部の集落遺跡では、土製勾玉・丸玉が井戸跡や土坑跡などで出土する例が多くみられ、他地域ではみられない独自の地域性を示す。

古墳時代中期には、前期古墳の組み合わせに滑石製玉類が加わるとともに、在地の石材で製作された玉類が多くみられるようになる。佐賀市久保泉丸山遺跡ST002号墳では、緑泥片岩製勾玉2点、蛇紋岩製勾玉5点、緑泥片岩製管玉24点とともに滑石製白玉530点が出土しており、当期の特徴を顕著に示している。

古墳時代後期には、玉類の材質、形態ともバリエーションが豊富になり、特に外来系の玉類が一定の割合で組み合わせに含まれる点が特徴である。唐津市^{つづみ}鞍古墳群ST005号墳では、須恵器の坏蓋に玉類が埋納された状態で出土しており、ヒスイ製の勾玉を親玉として、ガラス製丸玉、水晶製算盤玉、そして外来系のメノウ製丸玉が連となって用いられていたことが分かる。また、鳥栖市都谷古墳群ST014号墳では、同じ

くヒスイ製勾玉を親玉として水晶製切子玉を主体とする玉類が出土しており、その中に外来系のメノウ製小玉や多角形ガラス玉が含まれる組み合わせとなっている。これらの外来系の玉類が出土する古墳は、地域的にはある程度のまとまりを示すものの、佐賀県のほぼ全域で出土している。

3. 「連」の中の組み合わせ

各県の集成結果をもとに、出土状況などから頸飾りや手飾りなどの一つの「連」を構成する可能性が高い資料(165古墳256連)を抽出し、それぞれの「連」の中でどのような形態、素材の玉類が組み合わせられているかについて検討を行った。

勾玉については、ヒスイ製が最も多く、碧玉製、メノウ製、緑色凝灰岩製、滑石製、ガラス製、コハク製、水晶製などの多様な素材が用いられるが、緑色系の素材(ヒスイ、碧玉、緑色凝灰岩)が単一の「連」の中で共存する例は少ない。メノウ製勾玉は、これらの緑色系素材の勾玉とも共存する一方で、滑石製勾玉はヒスイ製勾玉とは共存しないなど、素材によって組み合わせに差がみられる。管玉は、碧玉と緑色凝灰岩の区別が明瞭ではない部分もあるが、前者が93例、後者が22例のうち、両者の共存事例は7例のみで、互いに排他的な様相を示している。つまり、碧玉と緑色凝灰岩の玉類については、勾玉、管玉ともに共存する例は少ない点が特徴として挙げられる。

また、山陰系と思われる水晶製や碧玉製の切子玉のみで構成される「連」が、佐賀県牛原前田遺跡ST1603号墳、同上野古墳などで確認されており、特定の素材(もしくは形態)を選択して「連」としたか、または生産地から直接搬入された可能性が考えられる。

そして、古墳時代後期には、朝鮮半島に起源をもつと思われる外来系玉類(メノウ製丸玉・小玉、多角形ガラス玉など)が国内産の玉類と合わせて一つの「連」を構成する。これらの外来系玉類は北部九州を中心に分布することが知られており、このことは各地域でそれぞれの契機で入手された玉類が独自に「連」を構成し、副葬された可能性を示唆している。

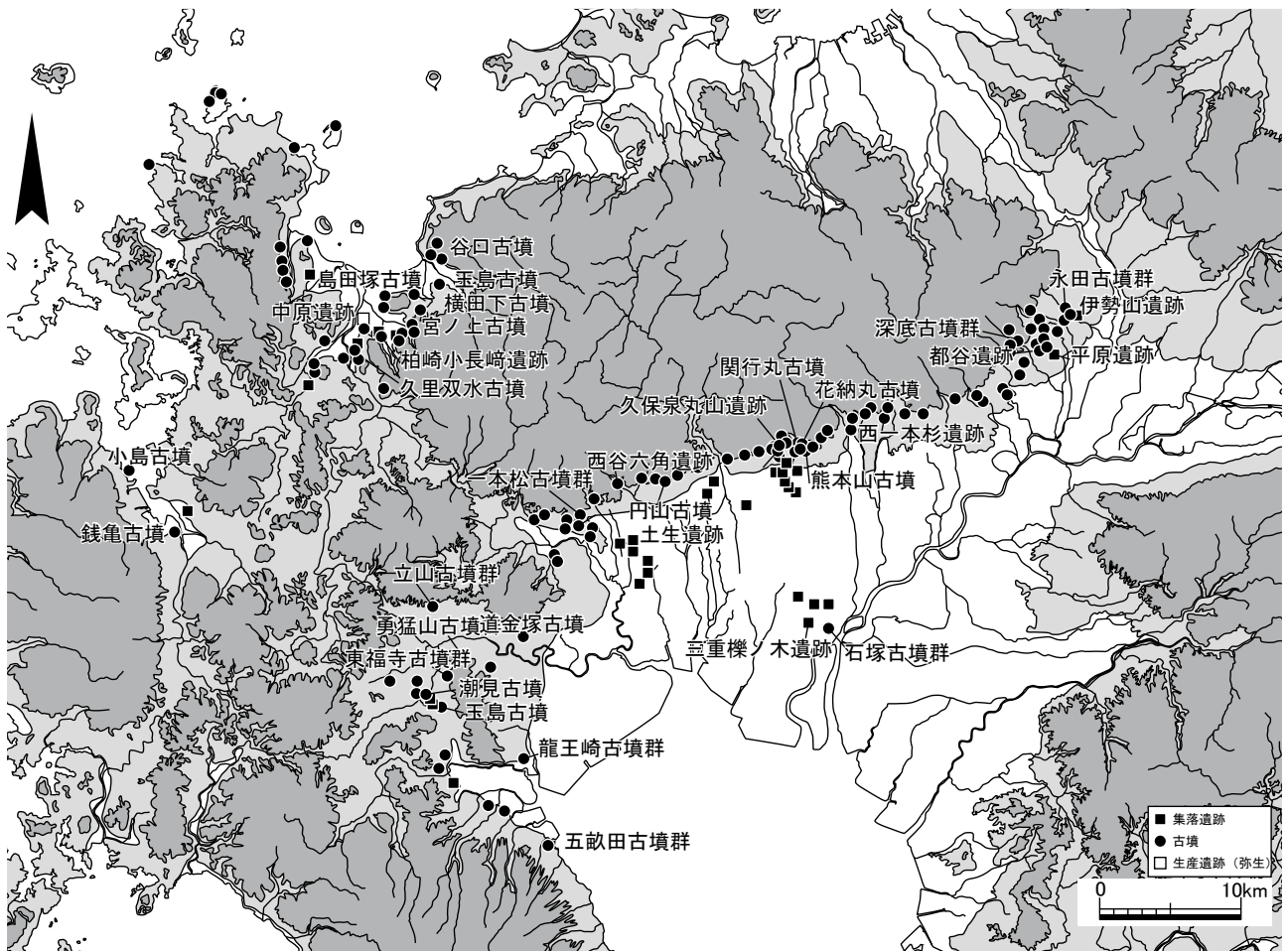


図1 佐賀県古墳時代の玉類出土遺跡分布図

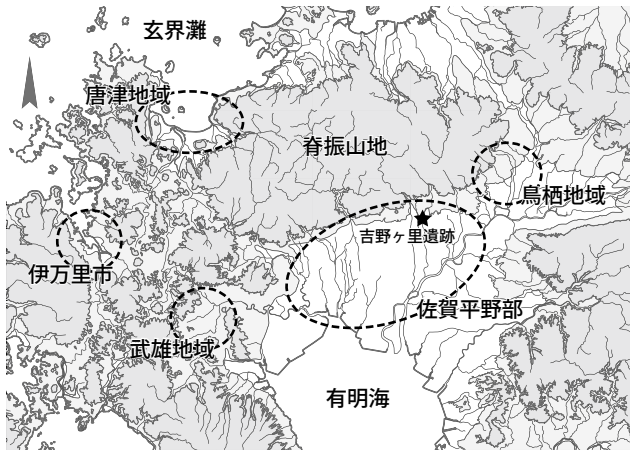


図2 佐賀県域の地域区分

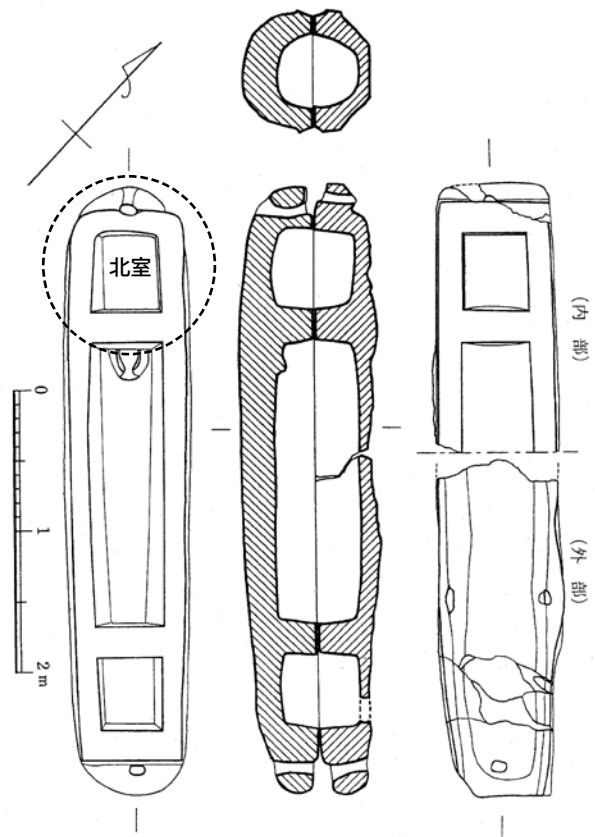
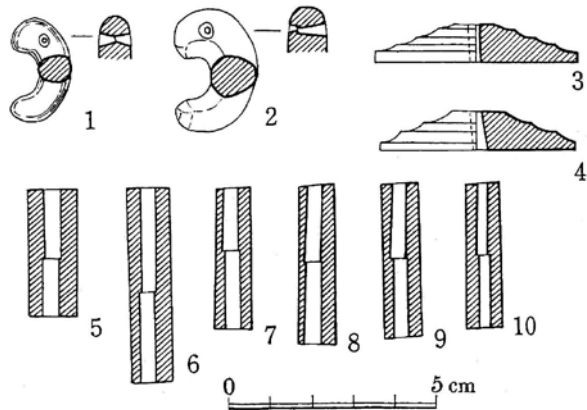


図3 佐賀市熊本山古墳出土石棺と北室出土玉類

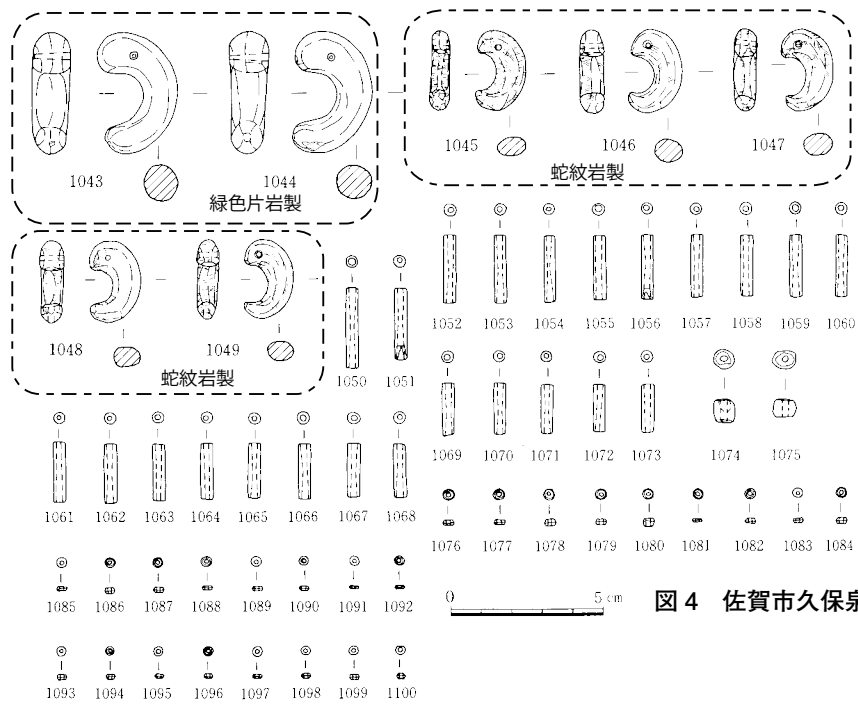


図4 佐賀市久保泉丸山 ST002 号墳出土 玉類

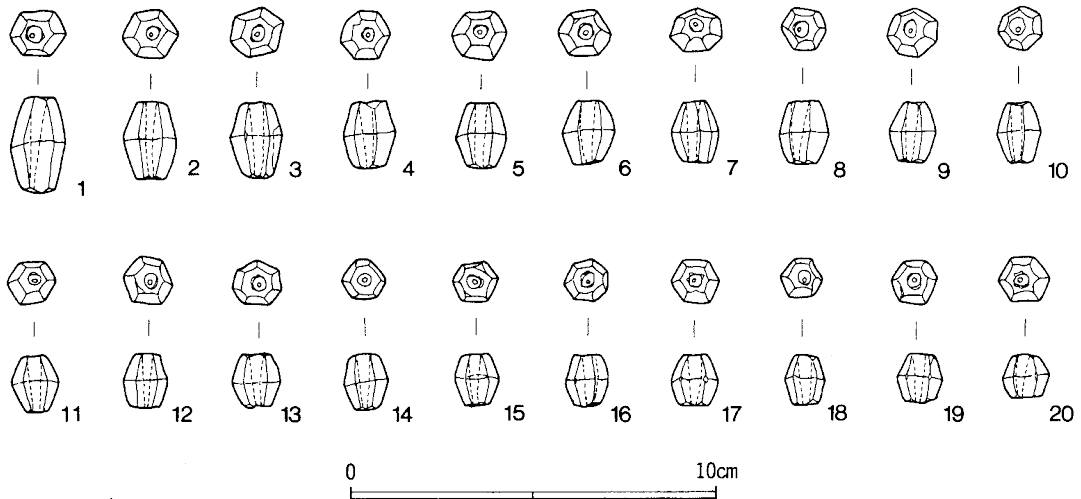


図5 鳥栖市牛原前田遺跡 ST1603 号墳出土 水晶製切子玉

挿図出典

図3：『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀県教育委員会1967年、図4：『久保泉丸山遺跡』佐賀県教育委員会1986年、図5：『牛原前田遺跡2』鳥栖市教育委員会1996年、写真1・2：筆者撮影



写真1 武雄市東福寺古墳群 ST014 号墳出土 玉類

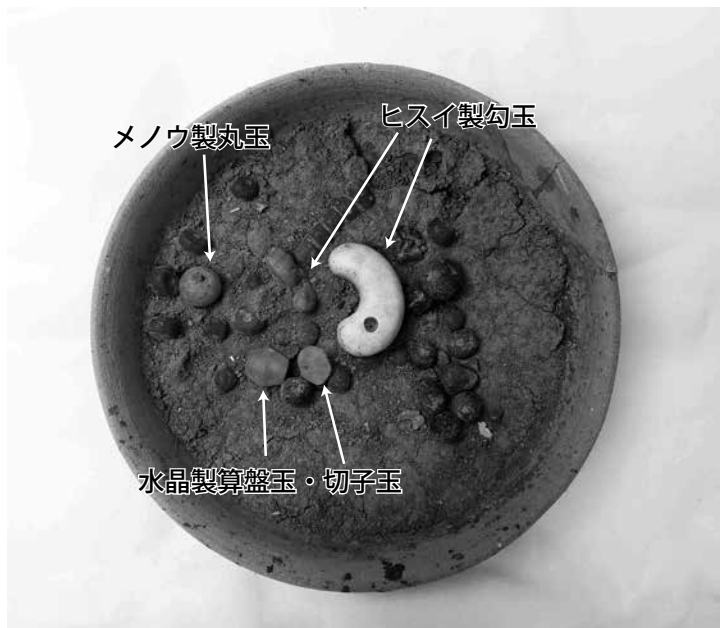


写真2 唐津市鞍古墳群 ST005 号墳出土 玉類

表1 「連」の組合せ（頸飾り）

県名	古墳名	時期 大別	出土状況	勾玉										管玉								
				ヒスイ	碧玉	緑色凝灰岩	メノウ	滑石	ガラス	コハク	水晶	青銅製	その他	碧玉	緑色凝灰岩	ガラス	滑石	メノウ	水晶	不明		
岡山県	用木4号墳	前期	連:頸飾り	2												8						
奈良県	新沢千塚500号墳	前期	連:頸飾り				1															33
奈良県	鳥の山古墳	前期	連3:頸飾り														14					
兵庫県	西野山3号墳	前期	連:頸飾り	1						1						83						
三重県	上椎ノ木1号墳	前期	連:頸飾り	1			3				1											
岡山県	金蔵山古墳	前期	連:頸飾り						72							35						
和歌山県	晒山1号墳	前期	連:一連2条	3											52							
岡山県	西山26号墳	前期	連:頸飾り		2			9									15					
岡山県	殿山11号墳	前期	連1:頸飾り	2											1	11	2					
岡山県	新庄天神山古墳	前期	連:頸飾り	1											36							
岡山県	月の輪古墳	中期	連1:頸飾り		2										12							
岡山県	月の輪古墳	中期	連2:頸飾り		2		2								15							
石川県	北吉田ノノ3号墳	中期	連:頸飾り				1	3														
福岡県	蒲生寺中古墳	中期	連:頸飾りまたは髪飾り		2			29								9						
宮崎県	尻屋根塚古墳	中期	連:頸飾り												7							
三重県	久米山6号墳	中期	連:頸飾り、手飾り?		1		8											32				
兵庫県	宮山古墳	中期	連5:頸飾り	3			1								11							
石川県	下開発茶臼山9号墳	中期	連1:頸飾り	1												3						
石川県	下開発茶臼山9号墳	中期	連2:頸飾り	1												5						
三重県	小谷13号墳	中期	連2:頸飾り				1											8				
三重県	落合3号墳	中期	連1:頸飾り				1															
三重県	落合10号墳	中期	連:頸飾り					1														
三重県	横山13号墳	中期	連1:頸飾り	3	1		3				2											
三重県	横山14号墳	中期	連:頸飾り	3			1	15			1					11						
奈良県	赤尾崩谷1号墳	中期	連1:頸飾り1	3						2												
奈良県	赤尾崩谷1号墳	中期	連2:頸飾り2								1											
兵庫県	ずえが谷7号墳	中期	連:頸飾り		3											19						
岡山県	みそのお2号墓	中期	連:頸飾り							2												
宮崎県	靱木1号地下式横穴墓	中期	連:頸飾り												2	9						
岡山県	牛飼山1号墳	中期	連:頸飾り					2								14						
鳥取県	屋喜山9号墳	中期	連:頸飾り					2							16							
奈良県	寺口忍海H-39号墳	後期	連:頸飾り		1										3							
三重県	屋河A4号墳	後期	連1:頸飾り							1					14							
三重県	東条1号墳	後期	連1:頸飾り	1											16							
三重県	東条1号墳	後期	連2:頸飾り							4							10					
岡山県	三輪山6号墳	後期	連:頸飾り												10							1
岡山県	四つ塚13号墳	後期	連:頸飾り												14							
岡山県	四つ塚13号墳	後期	連:頸飾り												11							
奈良県	額田部孤塚古墳	後期	連2:頸飾り												●							
奈良県	新沢千塚312号墳	後期	連3:頸飾り												13							
奈良県	新沢千塚323号墳	後期	連1:頸飾り1					13													14	
奈良県	石光山46号墳	後期	連:頸飾り	1											13							
兵庫県	下大谷1号墳	後期	連1:頸飾り												14							
兵庫県	下大谷1号墳	後期	連3:頸飾り												13							
兵庫県	三木山1号墳	後期	連:頸飾り												1							3
兵庫県	真南条山3号墳	後期	連:頸飾り				1								3	1						
三重県	谷山古墳	後期	連:頸飾り												10							
三重県	太岡寺1号墳	後期	連2:頸飾り		1						1				1							
三重県	太岡寺1号墳	後期	連3:頸飾り		1										11							
三重県	ツツミ2号墳	後期	連:頸飾り?												18							
三重県	鎌切3号墳	後期	連:頸飾り?												8							
三重県	河田古墳群A6号墳	後期	連2:頸飾り	1											2							2
岡山県	大畑1号墳	後期	連:頸飾り	1																		
鳥取県	川上74号墳	後期	連2:頸飾り												13							
岡山県	門の山14号墳	後期	連:頸飾り													1			2			
岡山県	婦本路3号墳	後期	連:頸飾り												10							
岡山県	小池谷1号墳	後期	連:頸飾り												7	3						
三重県	立野4号墳	後期	連1:頸飾り								1											
三重県	尻矢5号墳	後期	連:頸飾り												11							
三重県	山添2号墳	後期	連1:頸飾り	1			2								8							
三重県	河田古墳群A4号墳	後期	連1:頸飾り				3															3
三重県	カリコ谷古墳	後期	連1:頸飾り				1															
岡山県	婦本路4号墳	後期	連:頸飾り												1							
岡山県	齋富2号墳	後期	連:頸飾り												1							
岡山県	齋富5号墳	後期	連:頸飾り								1				9							
三重県	河田古墳群C23号墳	後期	連1:頸飾り					4														
三重県	石塚谷古墳	後期	連:頸飾り																			1
広島県	金田第2号古墳	後期	連:頸飾り		2		2				3											
兵庫県	旧与呂木3号墳	後期	連2:頸飾り	2											4							
兵庫県	旧吉田3号墳	後期	連1:頸飾り												9							
兵庫県	大池7号墳	後期	連:頸飾り												2							
三重県	奥出古墳群土壙墓SK6	後期	連1:頸飾り				1									5						
鳥取県	横枕80号墳	後期	連:頸飾り												1							
鳥取県	後口野1号墳	後期	連:頸飾り												3							3
岡山県	山之城8号墳	後期	連:頸飾り				3															

・勾玉、管玉を含む「連」のうち頸飾りの可能性が高いもの。

・勾玉は、ヒスイ製、碧玉製、緑色凝灰岩製、メノウ製を、管玉は碧玉製、緑色凝灰岩製を含むもの。

玉の広がり

岡山県

(岡山県古代吉備文化財センター 亀山 行雄)

1. はじめに

かつて吉備と呼ばれた岡山県は、九州と近畿を結ぶ瀬戸内海に面する位置にあって、その水運を利用した交易や塩・鉄などの生産にも支えられ、我が国の古代史上、重要な位置を占めてきた。とりわけ、前方後円墳に象徴される古墳秩序の創出に深く関わり、大王墓にも匹敵する巨大古墳を築いたことで知られている。ここでは、古墳時代の玉類副葬がどのように展開されたのか、この地域の事例を中心に概観したい。

2. 玉類副葬の広がり

弥生時代の玉類副葬は、中期の北部九州において盛んに行われたが、中国・四国で多く見られるようになるのは後期でも後半（2世紀後半）のことである。岡山県南西部にある全長80mの楯築遺跡は当時最大級の首長墓で、木槨・木棺という大陸・半島に淵源をもつ特異な埋葬施設に副葬された玉類は、ヒスイ製勾玉と碧玉製管玉という古墳時代前期に通有の組み合わせで構成される。ヒスイ製勾玉の副葬はその周辺の有力首長墓にも引き継がれており、これを古墳における玉類副葬の先駆けと評価する向きもある。しかし、その後、玉類の出土量は減少する傾向にあって、その入手が次第に困難になっていった状況がうかがえる。

この頃、近畿における玉類副葬は低調で、奈良県や京都府南部のような内陸部ではほとんど認められない。初期の前方後円墳として知られる京都府椿井大塚山古墳や奈良県黒塚古墳に玉類が見られないのも、あるいはこうした弥生時代以来の伝統が影響しているのかも知れない。玉類副葬が一定の広がりを見せ始めるのは、近畿中央部で生産されたヒスイ製の丁字頭勾玉が各地の有力首長に配布される前期中葉（4世紀初頭）以後のことである。玉類が三角縁神獣鏡などともに古墳秩序を表す威信財の一つとして位置づけられた最初の段階と言える。

3. 玉類副葬のあり方

さて、こうした玉類副葬は、下位の首長たちの間でどのように行われていたのだろうか。岡山県における古墳時代の小墳埋葬（横穴式石室を除く）516例について見てみると、玉類副葬の割合は各期を通じて20～29%とほぼ一定で、弥生時代末と比較しても大きな違いはない。しかし、玉類副葬が24%を占める墳丘内埋

葬に対し、墳丘外埋葬では5%にすぎず、著しい較差が認められる。墳丘をもたない埋葬の多くは小規模で簡略な構造であることから未成人埋葬と考えられ、玉類副葬は主に成人の間の習俗であったようだ。

また、墳丘内の埋葬間では玉類副葬の有無によって埋葬の規模や構造に際立った違いはないものの、岡山県中原古墳群では玉類と鉄製武器の副葬が埋葬ごとに分かれており、これを性差の反映と理解する意見もある。確かに、被葬者の性別が判明らかな副葬品を持つ埋葬164例について見ると、玉類副葬は男性で28%、女性で60%と、女性に伴う割合が多いようだ。しかし、玉類を副葬する埋葬の数は男女ともほぼ同じで、玉類に銅鏡を伴う割合も近似することから、玉類に期待された威信財としての役割に差はなかったのだろう。

4. 新しい玉類の登場

6世紀に入ると、奈良県曾我遺跡が衰退して近畿中央部からの玉類の供給は減少する。一方、島根県東部（出雲）では平玉・算盤玉・切子玉・丸玉といった器種を新たに加えるとともに、その材質転換を図るなどして多様な玉類を製作しており、群集墳の盛行とも相まって生産の最盛期を迎える。この時期、出雲で製作されたメノウ製勾玉の分布を見てみると、出雲に隣接する鳥取県西部や岡山県北西部、広島県北東部に集中し、それまでとは異なって生産地から直接的な供給がなされた様子がうかがえる。これは、近畿中央部で石製玉類の需要が低下したことと深く関わるものと思われるが、同様の傾向は岡山県でも認められる。

6世紀末、吉備の中枢を形成した江崎古墳のような有力首長墓ではもはや石製玉類を副葬していないが、さりとて金属製玉類も見られない。竜山石製の家形石棺に金製垂飾付耳飾や銀製空玉を副葬する八幡大塚2号墳は蘇我氏が関与する見島屯倉との繋がりが想定されており、吉備における金属製玉類の副葬はこうした近畿中央部と繋がりのある周縁部の首長の間で行われたようだ。さらに、金属製玉類の副葬は島根県岡田山古墳や鷲の湯病院跡横穴でも見られるが、これらは玉生産が集中的に行われていた花仙山にもほど近く、こうした地域の首長墓にさえ石製玉類の副葬が見られない状況は、出雲玉作りの終焉が間近に迫っていることを暗示しているかのようだ。

表1 西日本の弥生墓に副葬された玉類(米田克彦2017)

	北部九州系ヒスイ勾玉(太字は定形)		北陸系ヒスイ勾玉	ガラス勾玉	勾玉なし
	碧玉管玉	管玉なし	碧玉管玉	碧玉・ガラス管玉	碧玉・ガラス管玉
前期末～ 中期中葉	福岡・吉武高木3号 福岡・吉武高木117	福岡・吉武高木2号 福岡・吉武高木110			福岡・吉武高木1号・111号
中期中葉	佐賀・中原SJ11239 佐賀・中原SJ11249・ SJ13294・SJ13314	佐賀・中原SJ11235 佐賀・中原SJ13312 佐賀・中原SJ13371 佐賀・宇木汲田76号	福岡・田熊石畑2号		福岡・田熊石畑4号
中期中葉	佐賀・中原SJ11290 佐賀・中原SJ13232 佐賀・宇木汲田112号・119号	佐賀・宇木汲田11号 佐賀・宇木汲田24号 佐賀・宇木汲田15号 佐賀・中原SJ13206 佐賀・中原SJ13317・5号			佐賀・吉野ヶ里-1002
中期中葉	佐賀・牟田辺甕棺 佐賀・宇木汲田50号	福岡・三雲小路2号 佐賀・宇木汲田47号		福岡・須玖岡本-20	
後期中葉	佐賀・柘島山			鳥取・松原1号 京都・三坂神社3号	
後期中葉					
後期後葉	岡山・楯築	岡山・雲山鳥打1号-1 岡山・黒宮大塚-後	岡山・立坂 福井・小羽山30号	鳥根・西谷3号 京都・大風呂南1号 鳥取・桂見-1 福岡・平原	鳥取・宮内3号 鳥取・宮内1号-1 鳥取・湯坂1号 鳥取・門上谷1号-1 鳥根・仲仙寺9号
後期末	岡山・鑄物師谷1号 佐賀・中原ST13415 佐賀・中原SP13231	岡山・矢藤治山		京都・赤坂今井-4 京都・赤坂今井	徳島・萩原1号

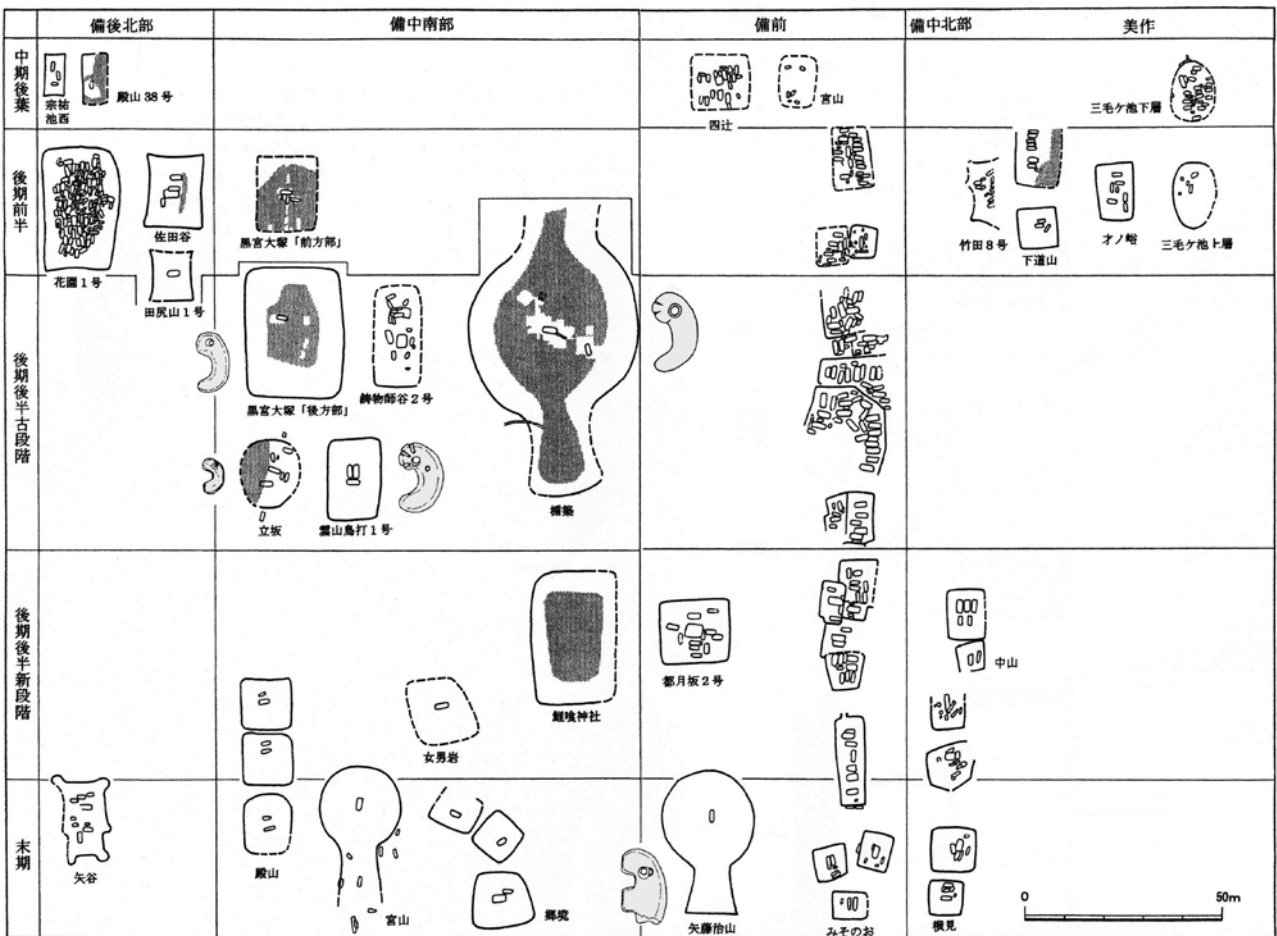


図1 吉備の弥生墓とヒスイ製勾玉(松木武彦2002・米田克彦2017)

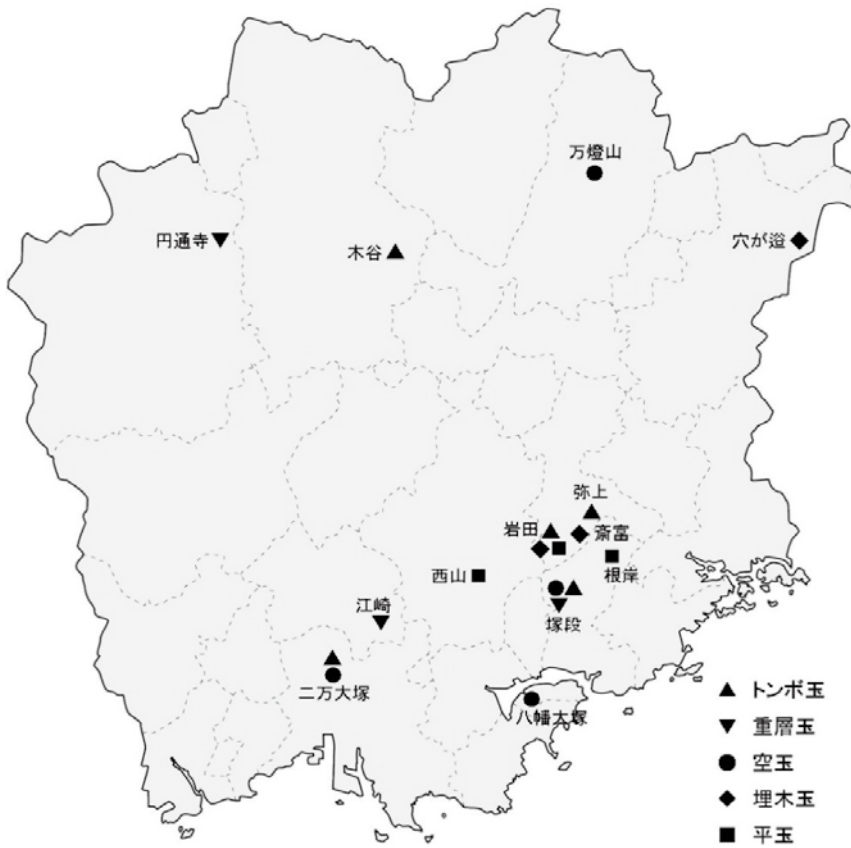


図4 6世紀の特殊な玉類（岡山県）



図5 岡山県八幡大塚2号墳の金製耳飾



図6 岡山県塚段古墳の重層玉
(岡山市教育委員会2016)



図7 島根県鷺の湯病院跡横穴の副葬品（複製、島根県教育委員会1998）

玉とマツリ—墓のマツリとカミマツリ

兵庫県

(兵庫県立考古博物館 鐵 英記)

1. はじめに

古墳時代の玉とマツリを関係を考えるためには、そもそも副葬品としての玉とマツリに使われた玉を区別できるのか否かという問題に突き当たる。それは玉に限らず副葬品には石製模造品のように、そもそも祭祀的性格を帯びた遺物が含まれるからである。玉の場合も古墳等から出土する滑石製玉類を副葬品(装身具)とするのか、祭祀に関わるものかを遺物そのものから判断するのは手持勾玉のような特殊なものを除けば困難で、出土状況から推定するのが適切ではないかと考えられる。以下、墓のマツリ・カミマツリと玉について、略述したい。

2. 墓のマツリ

一般に古墳時代の玉類は古墳出土のものがほとんどで、装身具が多くを占める。しかし、中には出土した状況やその材質から装身具とは捉えにくい事例も存在する。一つは埋葬施設以外の墳丘上、墳丘内、周溝などから出土したものである。数的には少ないものの、古代歴史文化協議会で集成されたデータを見ると一定程度は確認され、地域を超えて共通する様相が指摘できる。数が少ない理由は、墓のマツリにあまり玉が使われていなかったというよりも、埋葬施設以外での微細遺物の検出が困難であるためだろう。

墳丘祭祀の例としては、5世紀代の小型帆立貝式古墳である兵庫県住吉東古墳がある。墳丘盛土層から滑石製双孔円盤2点と白玉300点以上が出土しており、古墳築造の過程で玉類を用いた祭祀が行われたと考えられる。こうした事例としては他にも広島県長畑山北第2号古墳があり、玉類(滑石製白玉・土製小玉)に加えて、鉄器(摘鎌)1点を用いている。

加えて、周溝で祭祀を行うものでは、兵庫県舞子古墳群でガラス製小玉、奈良県安楽寺山2号墳と三重県沢遺跡では滑石製小玉・白玉が多量に見つかっている。これらの古墳では玉単独ではなく、土器の中に収めた状態で玉類を置いていたようである。

次に主体部から出土する玉類で祭祀に関わると判断される例を考えてみたい。第一は主体部であっても棺外から出土する場合である。兵庫県宮山古墳第3主体部では棺内に大量のガラス製小玉に金属製玉類、硬玉

製勾玉を組み合わせた複数の玉群が副葬され、同時に棺外には滑石製の扁平な勾玉に多数の白玉を加えたものが置かれていた。棺内と棺外で玉の材質・種類に明確な違いがある。また、木棺直葬墳の墓壙内や棺上から玉類が出土する例があり、これについても滑石やガラスの小玉が用いられる。

次に棺内からの出土例では、兵庫県中山第12号墳では副葬された須恵器壺の中から滑石製勾玉・白玉が出土している。この場合も勾玉は扁平な形状のものである。また、兵庫県白水瓢塚古墳では装飾品としての玉以外に加え、大量のガラス玉が一塊にされたり、撒かれたりしていた。

以上の例から、墓のマツリには出土する場所を問わず、主として滑石製玉類とガラス小玉が使用されると言える。

3. カミマツリ

古墳時代の祭祀遺跡としては、水に関するもの、豪族の居館などで執り行われたもの、磐座などに奉献されたものがあり、そこで出土する遺物は古墳の副葬品と共通するものが含まれている。ここではそうした遺物にどのような玉類が含まれているか考えてみたい。

祭祀遺跡から出土する玉として最も多いものは、墓のマツリと同様に滑石製の勾玉・白玉であろう。ただ、滑石製玉類が多量に出土する遺跡は、滑石製玉類の生産と祭祀を同時に行っている遺跡と祭祀のみを行う遺跡の2タイプに分かれる可能性がある。兵庫県内の例を挙げると、前者には居館あるいは区画された祭祀空間を伴う神戸市松野遺跡や南あわじ市木戸原遺跡が含まれている。また、神戸市新方遺跡では大量の滑石製玉類・模造品が土器集積後にまかれた状態で検出されている。後者には神戸市森北町遺跡などがある。

こうした集落での玉の祭祀とは別に、神祇祭祀の前身であると考えられる、三重県皇大神宮境内、奈良県大神神社禁足地とその周辺、島根県出雲大社境内遺跡でも玉類が出土している。これらの遺跡では滑石製玉類・模造品以外に硬玉・メノウ・碧玉製の勾玉・管玉といった通常の装身具の優品が出土しており、これには捧げものとしての玉から呪物としての玉への変遷があったことを示す可能性があるのではないだろうか。

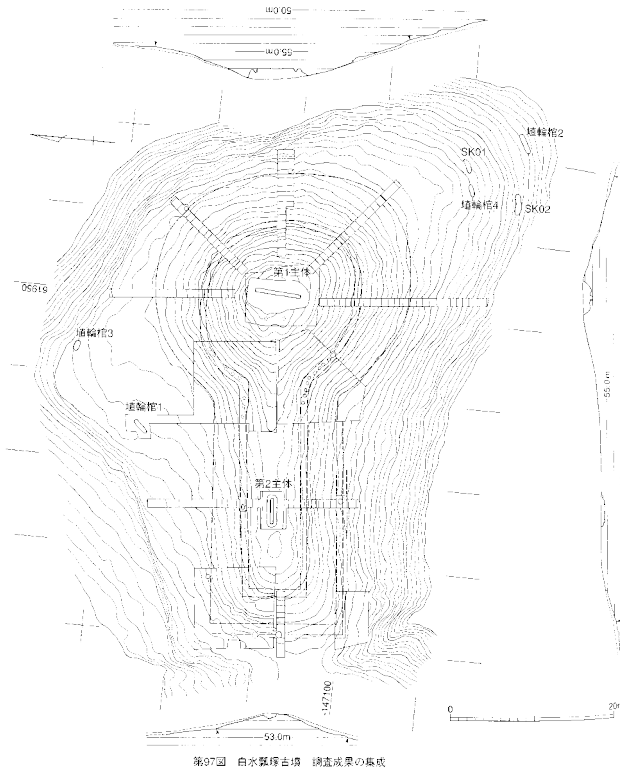


図1 白水瓢塚古墳 墳丘平面図・断面図



図2 白水瓢塚古墳 玉類出土状況

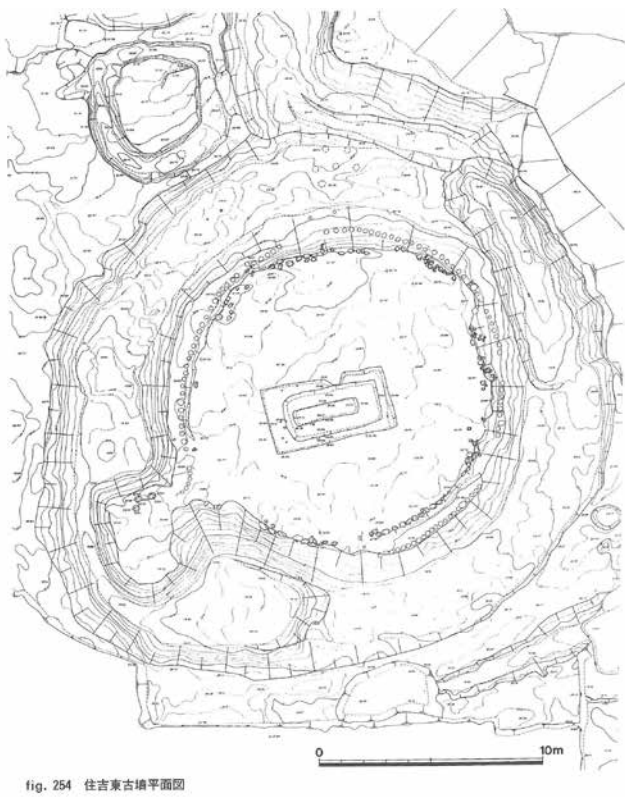
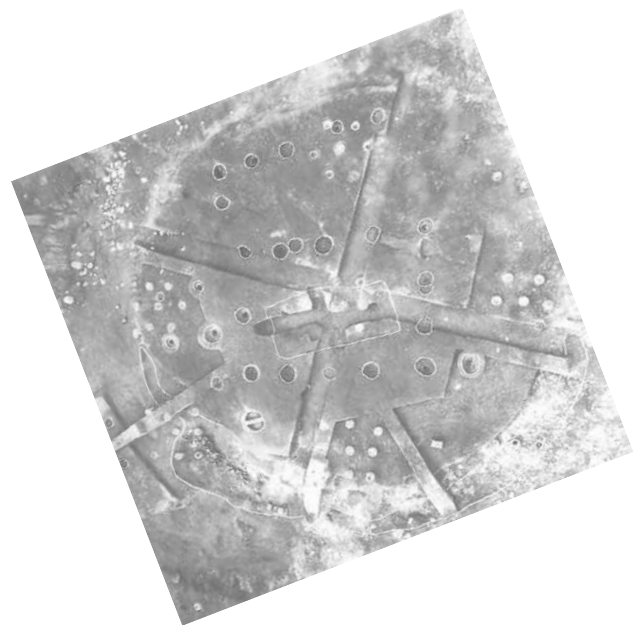


図3 住吉東古墳 平面図(左)と喪屋状遺構(右)

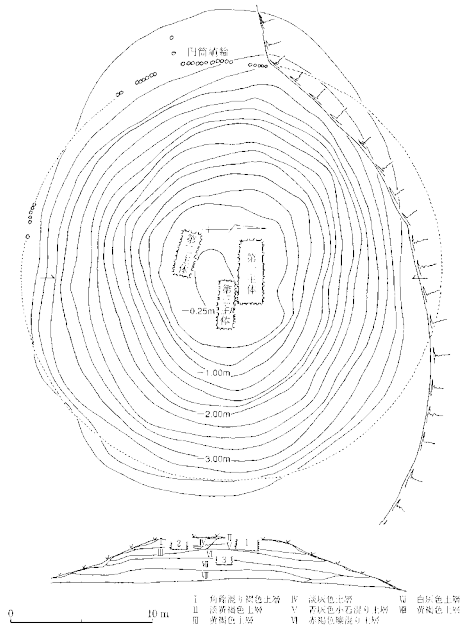


挿図出典

図1・2 『昭和63年神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 1992年

図3 『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2008年

図4 宮山古墳 墳丘平面図・断面図



挿図出典

図4 『姫路市史 第7巻下 資料編 考古』姫路市史編集専門委員会 2010年 (松本正信・加藤史郎『宮山古墳第2次発掘調査概報』姫路市文化財調査報告IV 1973年)

図5・6 『国指定重要文化財 宮山古墳出土品』姫路市教育委員会 2016年

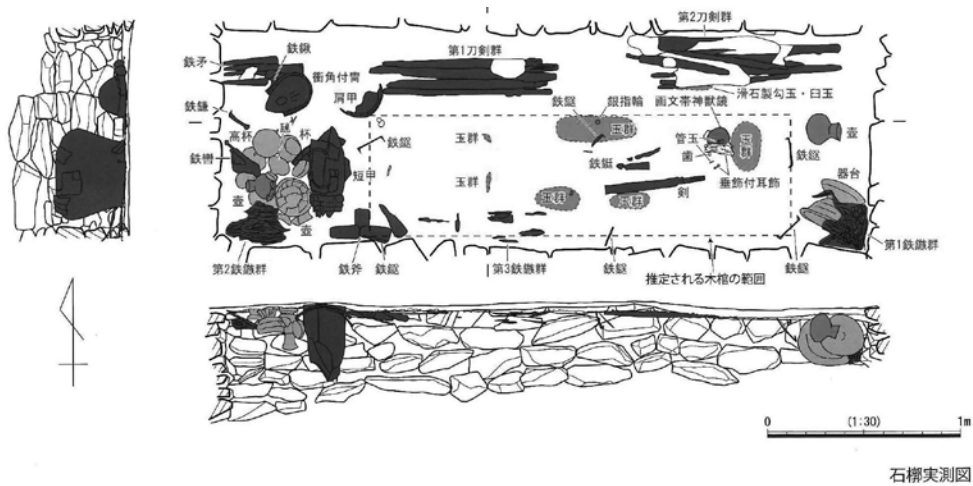


図5 宮山古墳 墳丘平面図・断面図

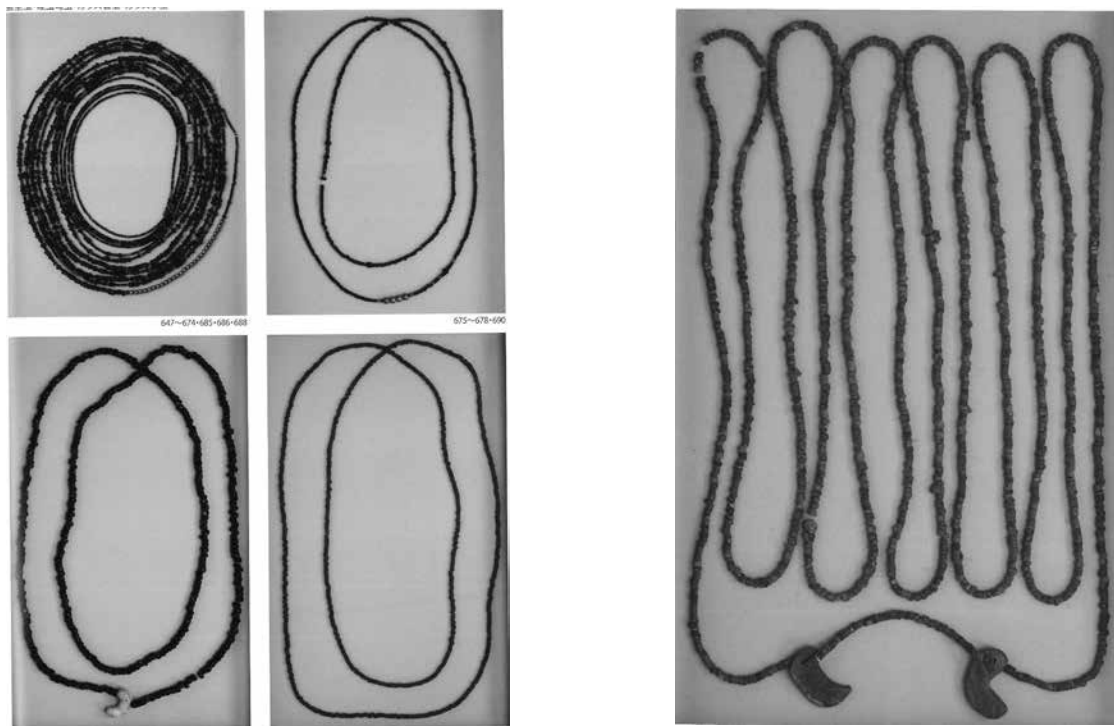


図6 宮山古墳 第3主体部出土 玉類 (左：金属・ガラス・硬玉 右：滑石)

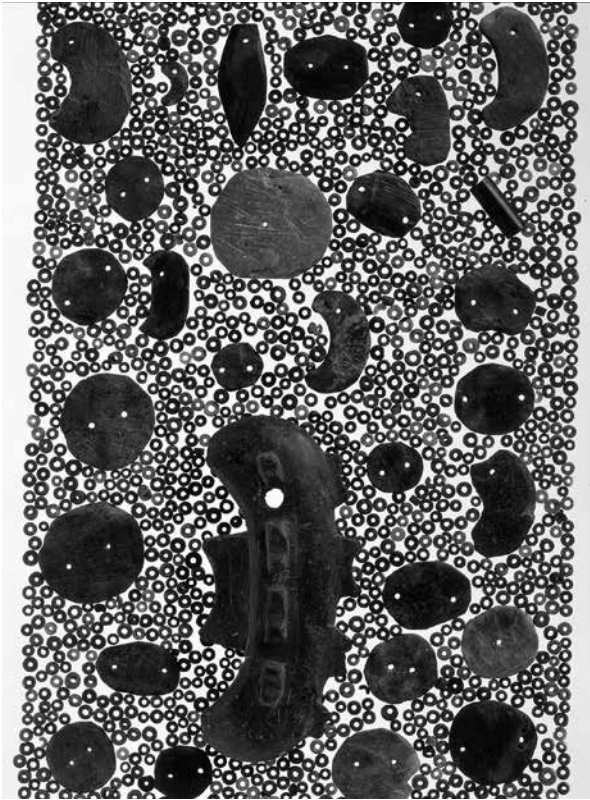


図7 兵庫県新方遺跡出土 滑石製品



図8 三重県皇大神宮境内出土 白玉類



図9 島根県出雲大社境内遺跡出土 勾玉・白玉
出雲大社蔵



図10 奈良県三輪山麓（狭井川之上）出土 玉類
大神神社蔵

挿図出典

図7 『平成9年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会 2000年

図8 東京国立博物館 画像データベース (列品番号J10487_J10512、画像番号C0095225)

図9・10 『百八十神坐寸出雲』企画展図録 島根県立古代出雲歴史博物館 2015年

「古墳時代の玉類」 関連年表

西暦	時代	日本列島での主な出来事(玉類と関連遺跡)	朝鮮半島(玉類と関連遺跡)
BC200	弥生前期	稲作農耕が伝わる (北部九州・山陰での朝鮮半島系碧玉製管玉の流通) (山陰での軟質緑色凝灰岩製管玉生産の開始) 島根・西川津遺跡	
	弥生中期	金属器・ガラス加工の開始 (北陸(菩提・那谷)産碧玉製管玉の生産と流通) 鳥取・青谷上寺地遺跡 石川・八日市地方遺跡	
AD1	鉄器の本格的普及 (山陰・北陸での水晶製玉類の生産と流通) 後漢光武帝より「漢委奴国王」金印を賜る(57)		
100	(硬質緑色凝灰岩製管玉の流通) 倭国大乱 島根・史跡出雲玉作跡宮ノ上地区 岡山・榑築遺跡		
200	卑弥呼、魏に遣使(239) 古墳の造営が始まる 奈良・纏向遺跡		
300	(古墳へヒスイ製勾玉、碧玉・青色ガラス製玉類の組み合わせでの副葬開始) 石川・藤江B遺跡 奈良・桜井茶臼山古墳 (緑色凝灰岩製腕輪形石製品の生産と流通) 石川・片山津玉造遺跡 (碧玉・メノウ・水晶製勾玉、滑石製玉類の生産と流通) 広島・石鎚山第1号古墳 島根・史跡出雲玉作跡71CⅡ号住居 (関東での滑石製・緑色凝灰岩製玉類、メノウ・水晶製勾玉の生産) 埼玉・反町遺跡、前原遺跡、正直遺跡		
400	百舌鳥・古市古墳群で巨大古墳の造営はじまる(5世紀前半～中ごろ) (古墳へのヒスイ製勾玉の副葬減少、山陰系碧玉・メノウ製、滑石製勾玉増加) 倭の五王が南朝に遣使 (古墳への装飾付ガラス玉、金属製空玉の副葬開始) 兵庫・宮山古墳 和歌山・車駕之古墳古墳 (片面穿孔碧玉製管玉の出現) (ヤマト王権による玉生産の最盛期) 奈良・曾我遺跡 奈良・布留遺跡、南郷遺跡群 島根・忌部中島玉作遺跡 「ワカタケル」銘文入鉄剣が九州と関東で出土 福井・十善の森古墳		
500	横穴式石室の普及 (出雲玉作りの最盛期、以降の出雲産玉類の全国的流通) (畿内における金属・ガラス製玉類の盛行、玉の材質・器種・組み合わせの多様化) 三重・東条1号墳 仏教が伝来(538) (九州の古墳での多角形ガラス玉、メノウ丸玉、天河石製玉等の外来系玉類の副葬が盛んになる) 佐賀・都谷古墳群 STO14号墳 (畿内での石製玉類の副葬が減少) 奈良・藤ノ木古墳		
600	飛鳥寺が建てられる(596) 前方後円墳築造停止 (古墳への外来系玉類の副葬がほぼ終息する) 大化の改新(乙巳の変:645) (出雲玉作りの終焉)		
700	藤原宮遷都(694) 古墳造営停止 奈良 (東北における出雲産玉類の大量消費) 平城京遷都(710) (鎮壇具・仏像装飾としての玉の使用) (出雲玉作りの再開) 東大寺大仏開眼(752)		

(古代歴史文化協議会調査部会事務局作成)

本資料関連の主な玉類出土遺跡の分布



主な玉作り遺跡の分布と玉類石材の産地

- | | | |
|-------------------|--------------------|---------------|
| 1. 八代玉作遺跡 (千葉県) | 12. 曾我遺跡 (奈良県) | ■ 弥生時代玉作り関連遺跡 |
| 2. 反町遺跡 (埼玉県) | 13. 纏向遺跡 (奈良県) | ● 古墳時代玉作り関連遺跡 |
| 3. 前原遺跡 (埼玉県) | 14. 布留遺跡 (奈良県) | |
| 4. 正直遺跡 (埼玉県) | 15. 南郷遺跡群 (奈良県) | |
| 5. 六反田南遺跡 (新潟県) | 16. 青谷上寺地遺跡 (鳥取県) | |
| 6. 南押上遺跡 (新潟県) | 17. 妻木晩田遺跡 (鳥取県) | |
| 7. 浜山遺跡 (富山県) | 18. 百塚第一遺跡 (鳥取県) | |
| 8. 藤江B遺跡 (石川県) | 19. 西川津遺跡 (島根県) | |
| 9. 浜竹松B遺跡 (石川県) | 20. 忌部中島玉作遺跡 (島根県) | |
| 10. 八日市地方遺跡 (石川県) | 21. 史跡出雲玉作跡 (島根県) | |
| 11. 片山津玉造遺跡 (石川県) | | |



『古墳時代の玉作りと神まつり』第1回古代歴史文化協議会講演会資料 2015年
掲載「本資料の関連玉作り遺跡の分布と玉類石材の主要産地」を再録

主な外来系玉類の出土古墳の分布



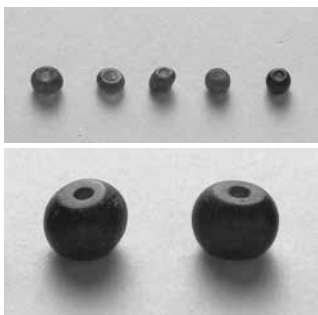
玉の種類 (玉類の外形分類)



勾玉
(広島県亀山第1号古墳)
碧玉製 (左)・メノウ製 (右)



管玉
(島根県上野1号墳)
碧玉製



小玉 (上)・丸玉 (下)
(三重県東条1号墳埋葬施設2)
ガラス製



臼玉
(奈良県曾我遺跡)
滑石製



算盤玉
(奈良県赤尾熊ヶ谷3号墳)
碧玉製※



切子玉
(佐賀県東福寺古墳群ST014号墳)
碧玉製



棗玉
(岡山県穴が途古墳)
埋木製



平玉
(奈良県新沢千塚272号墳)
メノウ製 (左)・碧玉製 (右)

※桜井市教育委員会提供、その他は古代歴史文化協議会構成県の提供

外来系玉類の種類



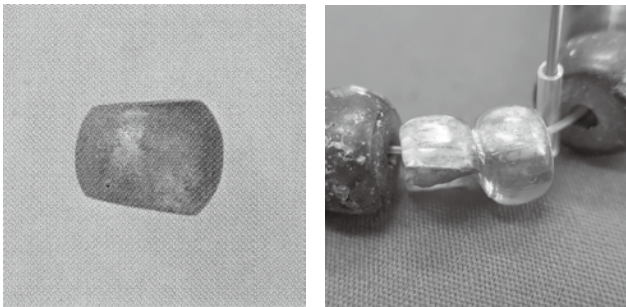
がんぎだま
雁木玉

2色以上のガラスで、(雁木=雁の行列のようなギザギザの) 縞模様が作り出された丸玉
(左：奈良県岡峯古墳、右：宮崎県銭亀塚古墳)



トンボ玉

色ガラスの玉に黄色ガラス小片などを溶着させ、トンボの複眼を連想させる斑点文の装飾となる丸玉
(左：福井県十善の森古墳、右：奈良県沼山古墳)



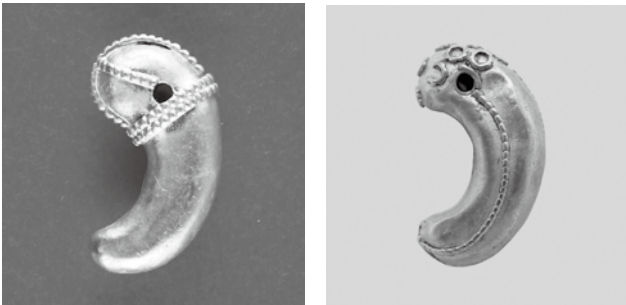
重層ガラス玉

金箔や銀箔をガラスにはさんだ丸玉、またはガラス球を金箔で包んでさらにガラスを被せた丸玉
(左：奈良県新沢千塚 126 号墳、右：福岡県唐船古墳)



多角形ガラス玉

透明度の高い薄水色で、立方体や直方体の形状を呈する玉
(左：宮崎県鈴鏡塚古墳、右：福岡県牛頭中通 6 号墳)



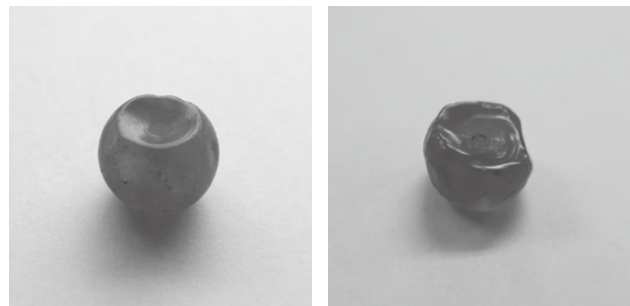
うつろだま
金属製空玉

金・金銅・銀などの金属の薄板を用いて、勾玉・丸玉・梔子玉・有段の玉などをそれぞれ半分かたち作り、2つを蠟付けした中空の玉
(左：金製勾玉 和歌山県車駕之古址古墳、中：金製勾玉 韓国玉田 M4 号墳 [慶尚大学校博物館提供]、右：銀製勾玉 (頭部と尾部にガラス装飾) と銀製丸玉 奈良県慈恩寺 1 号墳)



てんがせき
天河石製玉

アマゾナイトともよばれる青緑色の石材を用いた玉で、青銅器時代の朝鮮半島南部と、併行する弥生時代前期～中期前半の北部九州を中心に分布。近年古墳からの出土例が確認できる
(左：丸玉 福岡県上ヶ原 10 号墳、右：勾玉 奈良県ホリノヲ 2 号墳)



メノウ丸玉

赤みの強いメノウを用いた丸玉で、片側の孔の周辺が大きく窪み、ほかにも表面に凹凸を残したままのものが多いのが特徴
(左：福岡県平原古墳、右：福岡県丸ノ口 V-5 号墳)

『玉から古代日韓交流を探る』第 2 回古代歴史文化協議会講演会資料 2016 年に掲載を再録、一部修正

